

虎邱山

丁卯秋立之登



目錄

序

邱山 (附歷代名人題詠)

圖畫 鶯鶯墳 斷樑殿 慈惠泉 真孃墓 生公講臺 千人石 枕石 點頭石 白蓮池 試劍石 二

仙亭 雙吊桶 擁翠山房 冷香閣 劍池 御碑亭 觀音殿 仙人洞

州之名勝

圖畫 虎邱山 留園 西園 拙政園 北寺塔 寒山寺 雙塔寺 玄妙觀 寶帶橋

附刊余二十三年風雨飄零的苦心談

序一 王博謙撰

序二 費汝升撰

圖畫 王月芝女史紀念攝影 王老先生蕤君公之手蹟 徽伯留學日本時叔姪兄弟三人之合影 松江名

士楊了公致徽伯書 月芝蘇州經營製繩事業之狀況 徽伯蘇州創辦蘇報之狀況 徽伯前清時代

在日本創辦古今圖書局之狀況 徽伯前清時代在日本創辦日華新報社之狀況 湖南章士釗奔走

革命時致徽伯書 湖南章士釗籌辦甲寅時致徽伯書 徽伯任國際新聞協會中國代表時之公牘

湖南名士葉德輝致徽伯書

余二十三年風雨飄零的苦心談

江季子致章行嚴書

王蔭泰致其未婚妻兄陳漢翹書

書後

自序

虎邱山者。吳人之所恆遊者也。有雙石絕磻之勝。於郡中之山爲最名者也。去城可七八里。其山無高巖邃壑。獨以近城故。簫鼓樓船。無日無之。凡月之夜。花之晨。雪之夕。遊人往來。紛錯如織。而每值星期。東西人之觀光三吳。來遊於此者。具酒肴。載管絃。各自以其輩至。叫呼歡笑。絡繹於道。曠達而豪放者則有之矣。鮮有以文字爲樂者也。故今日遊而明日遂忘之。夫何故。無傳之者如此也。試觀列強。莫不於本國名勝之區。咸有各國文字游覽指南之作。以餉遠人。蓋欲發揚自國文化於世界耳。余之是篇。亦斯意焉。

中華民國十六年八月二十日王月芝書於蘇州精養軒時年四十有二

例言

- 一本編專爲中東兩國人士之遊虎邱山者便利實用按圖索驥一目了然
- 一本編蘇州名勝各則採自坊間流行之蘇州指南一書擇其最著名者摘錄之
- 一本編歷代名人題詠選諸虎阜志中之文藝篇
- 一附刊「余二十二年風雨飄零的苦心談」一篇春間蘇州明報業經刊出茲再刪改入之

MG
k928.3
58

歷代名人題詠

王月芝選錄

虎邱

顏真卿

不到東西寺於今五十春。劫來徒舊賞。
林壑宛相親。吳子多藏日。秦皇厭勝辰。
劍池穿萬仞。盤石坐千人。金氣騰爲虎。
翠臺化若神。登壇仰生一。捨宅歎瓊瑤。
中嶺分雙樹。迴巒絕四鄰。窺臨江海接。
崇飾歲時新。客有神仙者。于茲雅麗陳。
名高清遠峽。文聚斗牛津。跡異心甯問。
聲同質豈均。悠然千載後。知我挹光塵。

虎邱

陸龜蒙

虎邱山

●虎邱山

王月芝

原

木田月

多

國立北平圖書館藏



吳中以山水勝。而虎邱最奇。虎邱一名海湧峯。高巖石峻幽。古蹟昭然。天下之奇藏焉。當夫天朗氣清。或命巾車。或駕扁舟。登其巔而放目遠眺之。雲霧縹緲。環列如抱。峯巒起伏。若隱若現。足以擴眼界。吸新氣。心曠神怡。寵辱皆忘。有不超然物外。飄飄欲仙者乎。輓近經邑中士紳。鳩工修葺。更建冷香閣於石觀音殿之陽。繞以寒梅三百枝。山光水色。煥然一新。遊資不遠千里而來者。四季如一日也。

虎邱山

吳地は山水の名勝を以て天下に冠たり、虎邱は其中最も佳境とす、別名を海湧峯と稱する、高さ百尺に過ぎずと雖、巖石の峻

一



虎邱山

一代先後賢聲劇河漢。況茲邁古土。復歷蒼崖。窺辰經幾十萬。邈與靈壽玩。海嶽尙推移。都鄙固蕪漫。竊僧下高閣。獨息沒遠岸。嘯初風雨來。吟餘鐘韻亂。如何鍊精魂。萬祀忽欲半。甯爲斷臂憂。肯作秋柏散。吾聞鄠宮內。日月自昏旦。左右修文郎。縱橫灑簫翰。斯人久溟漠。得不垂慨歎。庶或有神交。相從重興贊。

虎邱

范仲淹

昔見虎耽耽。今爲佛子巖。雲寒不出寺。劍淨未離潭。幽步蘿垂徑。高禪雲閉庵。吳都十萬戶。烟瓦亘東南。

二

乎たる幽明の奥ゆかしき、古蹟としての價値は十分に認めらる、天氣晴朗氣清き一日、風徐に吹き來る春の麗かき一日、扁舟に竿さし、或は輕車に駕して、巖上に高く登りて見んか、遠方は是れ靈巖、天平、鄧尉の諸山にして穹隆の形狀、龍の將に氣を吐いて雲を起こさんとするに似たり、峯巒の一起一伏は隠れたるが如く現れたるが如し、實に眼界の靈感に觸るる、のみにあらず、實に新鮮の空氣を以收せられ心曠く神怡々たり、俗界を脱して天界に遊ぶの感興を覺ゆ、近頃地方の紳士の資を集めて石觀音殿の傍に冷香閣なるものを建立せり、繞するに梅樹數百株を以てす、山光水色、煥然として面目を新たにす中外の遊客千里を遠からずして沓として來り紛として往く、まことに四季共に絶景の眺望なり。

虎邱 蘇軾

入門無平地。石路穿細嶺。陰風生澗壑。
古木翳潭井。淇盧誰復見。秋水光耿耿。
鐵花秀巖壁。殺氣禁蛙黽。幽幽生公堂。
左右立頑礪。當年或未信。異種服精猛。
胡爲百歲後。仙鬼互馳騁。竊然留清詩。
讀者爲悲哽。東軒有佳致。雲水麗千頃。
熙熙覽生物。春意破凄冷。我來屬無事。
暖日相與永。喜鵲翻初旦。愁鴛踏落景。
坐見漁樵還新月。溪上影。悟彼良自哂。
歸田行可請。

又 前人

虎邱山

初崇禎時。蠡口人倪士義。負笈異地。年久不歸。妻楊氏。疑士義死。絕食而亡。士義及第歸。聞耗大悲。不久亦氣忿而死。後人義之。併葬於此。鴛鴦二字。乃崇禎帝御賜。今經邑紳重建石亭。並刊以「身膏白刃風猶烈。骨葬青山土亦香」一聯。嗚呼。可以風矣。

鴛鴦墳 入山門。沿山街北行。其西有亭翼然者。鴛鴦墓也。



虎邱名勝圖一(鴛鴦墳)

虎邱山

白箭威猶激青山與已濃鶴閒雲作態
駝臥草埋峯踞履若可教卜鄰應見容
因公問回老何處定相逢

太常齋未解不肯對纖濃只遣三千履
來遊十二峯林空得清唱潭淨寫衰容
歸去瑤臺路還應月下逢

又 前人

當年太白此相浮老守娛賓得二邱白
髮重來故人盡空餘叢桂小山幽
青蓋紅旗映玉山新詩小草落元泉風
流使者人爭看知有真娘立道邊
舞衣歌扇轉眼空只有青山香霧中莫

四

▲鴛鴦墳 山門に入ると、山の麓が見える、之れに沿ふて、北の方に行くと、西の方に亭がある。そこが鴛鴦墓と云ふ、初崇禎時代に、倪士義なる人あり、求學の爲に出奔して、年久うなつても歸つて來ないので、その妻の楊氏は、良人は異郷で死んだものと思つて、以來斷食をつづけて世を去つた、ところで士義は求學の目的を遂して故郷に錦を飾つて歸ると、妻の慘死をきいて、悲しみの餘、痛恨の極、遂に不歸の客となつた、後の人々此に合葬して其夫婦の情義細やかなるを後世に傳へる爲に墓石を建立した鴛鴦の二文字は崇禎帝の御賜であると、近頃地方の石士が石亭を建立し且「身膏白刃風猶烈、骨葬青山土亦香」の一聯を附した。

□斷樑殿 沿鴛鴦墳而上。有斷樑殿。(即今二山門)樑木中斷。

共吳王鬪百草使君未敢借鷲鴻

虎邱 方惟深

晉人事高曠所得多奇僻雲巖佛子廬

曾爲二王宅當時築樂地俯仰成今昔

林泉亦余好徘徊想遺跡那知非昔人

復作登臨客

虎邱 鄭思肖

何年海湧來霹靂破地脈裂透千仞深

嵌空削蒼壁山潤石乳甘秋冷鐵花碧

闔閭雲空愁銀虎去無迹蛟龍鎮奇險

拱護梵王宅

虎邱 王賓

虎邱山

而堅固異常。殿爲乾隆南巡時所飭造。工匠錯配木料。幾難落成

。幸有異人指點。方得竣

工。

▲斷樑殿 右の比翼塚に

沿ふて上ると、斷樑殿と

云ふのがある、今は二山

門である、樑の中央が二

つに斷たれてある、が餘

程堅固で、此殿は乾隆皇

帝の南巡せられし折に命

令して建造せられしもの

である、建築の際に非常に骨を折つたそうだが、當時外人の指



(殿樑斷) 二圖勝名邱虎

虎邱山

歌馬來遊得幾春留詩巖壁爲何人長
生心慕神仙侶終不貪生逢逆臣

虎邱 文徵明

雲巖四月野棠開無數清陰覆綠苔意
到不嫌山近郭春歸聊與客登臺芳墳
誰識真娘在水品曾遭陸羽來滿路碧
烟風自散月中徐棹酒船回

虎邱 祝允明

春光滿郊野吾獨愛西邱碧水一池定
白雲千頃流散人歌小海幼伎撥篋後
遠著謝公屐高登王粲樓人生一杯酒
又是一年遊

岡で竣工しられたと云ふことである。

■慈慈泉 過斷樑殿。不數十歩。道旁有小屋一椽。繞鐵網作障
者。爲慈慈泉

○係梁時慈慈

尊者。指點而

成。泉水甘冽

○飲之可以去

病云。

▲慈慈泉 斷

樑殿を過ぎる

こゝ十歩で道傍に小さい家屋の椽がある鐵條網で繞らしてある
が、それがこれである、梁の時代に慈慈尊なるものが、指闕し



(泉 慈 慈) 三 圖 勝 名 邱 虎

又

醉扶紅袖上飛樓。又是新年第一遊。欲
撥詩腸重進酒。誤將鐵筍觸空候。

虎邱

唐寅

朱明麗景屬炎州。蘭橈桂楫遂娛游。遂
蔭追魏。暫容與回波轉。藻若夷猶日承
綺。扇釵光發。山入仙杯酒氣柔。幸莫瑤
魔論所願。皓首期言伏此邱。

虎邱

王世貞

風至開山閣。雲歸臥佛牀。薄岩施屐易。
疎竹進杯涼。醉益狂奴態。游偏傲吏長。
興酣公莫舞。秋色起干將。

虎邱山

て出來上つたので、泉の水は甘味を帯びてゐる之れを飲めば百
病癒ゆと傳へられてゐる。

真娘墓 自

枕石拾階而上

。斷碣一塊。

轟然映於眼簾

者。真娘墓也

。真娘爲吳名

妓。胡其姓。

瑞珍其名。父

爲官清廉。被奸徒陷害死。瑞珍弱質無依。流落爲妓。然琴棋書

畫。無所不工。而冰心貞操。無異閨秀。客至。作長談而已。一



(墓娘真)四圖勝名邱虎

虎邱山

虎邱 董其昌

生公臺上雨花新。時菊霜楓映畫輪。終
舌金銀沉夜壑。何年風雨笑延津。性如
元。度。孰。名。理。宦。似。王。宏。愛。酒。人。若。道。虎
谿。同。虎。阜。應。知。頑。石。點。頭。頻。

虎邱 王衡

木未已蒼然。微陽掛客船。雅歸人影外。
烏宿塔燈前。宴坐經行地。默參歌舞禪。
厭厭清夜永。月到可中圓。

虎邱 梅鼎祚

未作五湖游。先來問虎邱。一峯傳海湧。
片石儼星浮。塔散珠光曉。池合劍氣秋。

日。有客至。堅請留宿。瑞珍許以來日。客翌日復來。而瑞珍已
投環自盡。一縷芳魂。追隨阿父去矣。客哀之。爲築墓於此。題
名真娘墓。

▲真娘墓 右枕石のほごりを上ると、轟然として吾人の眼に映
るものがある、乃真娘墓である彼女は呉の名妓で姓は胡、名を
瑞珍と云ふ、父は官吏として廉直な人であつたが、奸人に陥し
入れられて、殺害された、娘の彼れは落魄して妓となつた、彼
女は書畫や彈琴の道にも巧みで泥中の蓮とでも云はうか、まこ
とに得難い名妓となつた、また一生を通じて真女を守つた客人
の至つては長夜に雅談をするのみである某日客人の來つて同宿
を要求したが彼女は明日來るべきやうに云つたので其人は翌く
る日來て見ると、豈計らんや彼女は自盡を遂げてゐた、一縷芳

且無催喚酒茶盃客能留

劍池 李規

闔閭葬日勞人力。羸政穿來役鬼功。澄

碧尙疑神物在。等閒雷雨起潭中。

劍池 來鵠

秋水蓮花三四枝。我來慷慨步遲遲。不

決浮雲斬邪佞。直成龍去欲何爲。

劍池 朱長文

萬丈澄潭挾兩崖。削成奇壁自天開。龍

泉一淬名因得。不待秦皇發塚來。

劍池 楊備

三尺龍盤古。到今波光凝碧暮。雲深沉

虎邱山

魂は父の跡を追ふて黄泉に去つたのである、客人其心を憫みて此に碑を立てたのがそれである。

■生公講台 千人石之北

。有生公講台。李陽冰篆

書四字。清晰可辨。或云

爲蔡襄所書。無可攷矣。

▲生公講台 千人石の北

方に、生公講台がある、

李陽冰が四字を篆書した

のたゞ、晰清よく認めら

る。



(臺講公生)五圖勝名邱虎

虎邱山

絲。不。斷。應。無。底。山。脚。池。心。徹。海。心。

劍池 方惟深

雲。岸。倚。天。開。蒼。澗。下。滄。徹。世。傳。靈。劍。飛。
山。石。千。丈。裂。神。蹤。去。不。返。今。作。蛟。龍。穴。
是。非。滌。難。詰。歲。久。多。異。說。惟。當。清。夜。來。
靜。賞。潭。上。月。

劍池 徐輔

劍。去。池。空。一。水。寒。遊。人。到。此。憑。闌。千。年。
來。世。事。消。磨。盡。只。有。青。山。依。舊。看。

劍池 范成大

石。緯。澗。渟。劍。氣。潛。誰。將。樓。閣。苦。莊。嚴。只。
知。嘆。熱。遊。人。眼。不。道。蒼。藤。翠。木。嫌。

千人石 山之腰。有大盤石。曰千人石。相傳列國年間。吳王

雇匠千人。興工築墳。墳

成。恐露秘密。設計盡誘

工匠於此而殺之。後人遂

名此石曰千人石。一說此

石可容千人。故名。旁有

淨土橋。為僧宗洗所建。

▲千人石 山の中央腰間

に、大盤石がある、千人

石と云ふ、列國年間に吳

王千人の石工を雇ひ、墓

を造らしめた、墓石成るに及びて、其計劃が秘密であるので、



(石人千)六圖勝名邱虎

劍池 方 琛

裂。破。幽。崖。續。古。苔。一。泓。俯。瞰。石。房。開。曉。
輓。竟。日。知。無。盡。泉。脈。元。從。海。底。來。

劍池 林景熙

鑿。開。神。斧。是。何。年。珠。雁。金。鳧。鎖。冷。烟。辟。
荔。帶。雲。懸。古。木。輓。輓。卷。月。出。秋。泉。岩。前。
洗。劍。精。疑。伏。林。下。烹。泉。味。亦。禪。高。倚。石。
闌。清。噓。發。恐。驚。池。底。老。龍。眠。

劍池 周文英

澗。泉。一。脈。古。今。清。試。劍。秦。皇。曾。未。曾。不。
解。爲。霖。作。雲。雨。煎。茶。者。筍。餉。山。僧。

劍池 楊維禎

虎邱山

他に知られるのを、恐れて此等一千人の石工を皆殺しにしたと

、後に千人石と名づけたが、或は一千の人が坐し得られるから

そう名づけたとも傳へて

ゐる、浄土橋と云ふ橋が

そばにある、僧人宗洗が

建造したのである。

■枕石 與試劍石隔道而

峙者。曰枕石。昔唐寅秋

香。巧值於此。枕石題詩

。千古傳爲佳話。枕石。

一名蛭蝸石。取形似而已



(石 枕) 七 圖 勝 名 邱 虎

虎邱山

金精夜伏觸孤游東國山川霽氣收開
倚真娘墳上樹落花飛滿闌閣邱

劍池 鄒韶

殘雪落林度西嶺陰澗寒泉凝素練雨
僧倚樹聽微鐘一鶴臨流照清影松間
旭日映山椒白雲英英如雨飄何當爲
置王摩詰更添一樹紅芭蕉

劍池 顧仲瑛

地圻重澗積人匹寶劍藏千年斷崖月
何處照龍光

劍池 朱德潤

蔓木叢蒼古梵寒鑿開崖竇見波瀾莫

▲枕石 試劍石と一路を隔て、相對峙してゐる、古昔唐時代に
寅秋香なるもの此に巧みに色香を欲しいまま、にしたと枕石の
題詩千古の傳説ごある又の名を凝睡石と云ふ。

■點頭石 白

蓮池旁。有點
頭石。晉生公
和尚說法時。

人無信者。乃
聚石爲徒。宣
講禪理。頑石
皆點頭示意云。

▲點頭石

白蓮池の傍にある、晉の生公和尚說法の時、人の信



(石頭點)八圖勝名邱虎

邪久作蒼龍去猶作東吳劍氣看

劍池 周伯琦

雪。色。於。苑。斷。林。邱。石。池。白。晝。劍。光。愁。千
年。雲。氣。常。封。闕。山。石。擊。擊。池。不。流。

劍池 文徵明

吳王埋玉幾千年。水落池空得墓磚。地
下誰曾求寶劍。眼中我已見桑田。金甌
寂寞隨塵劫。石闕分明有洞天。安得元
之論往事。滿山寒日散蒼烟。

又 前人

舍舟卽嶽崎探策入窈窕窮崖壁蒼鐵
直下千尋表絕巖懸飛梁仰首心欲悼

虎邱山

じる者が無かつたので、石を聚めて門徒ごなし禪理を宣講して
ゐると、頑固な石が皆頭を垂れて聴意を示したとある。

白蓮池 講台之下。有

周可百步之池。名白蓮池

。生公說法。時值嚴冬。

而池生千葉蓮花。潔白如

雪。名雪蓮。白蓮池之名

。以此。

▲白蓮池 講台の下に周

圍百歩大の池水がある、

生公の法を説く時に嚴冬

の頃、池に千葉の蓮花が



(池蓮白)九闕勝名邱虎

虎邱山

陰。壑。多。長。風。六。月。更。幽。悄。秋。聲。落。井。幹。
翠。雨。滴。深。篠。與。君。富。間。懷。竟。日。恣。幽。討。
都。將。雙。足。塵。濯。向。千。年。沼。

試劍石

周 弼

吳。王。鑄。劍。成。自。謂。古。難。比。試。之。高。山。嶺。
不。裂。斷。橫。理。那。無。昔。時。人。相。逢。于。將。里。
故。宮。宮。中。白。日。長。春。風。野。田。百。草。香。有。
誰。慷。慨。不。平。事。披。謁。踏。花。推。酒。缸。

試劍石

楊維禎

新。鑄。于。將。砧。石。頭。剛。風。吹。下。海。峯。秋。誰。
知。越。貢。洪。盧。劍。已。遂。飛。龍。潭。水。遊。

試劍石

顧阿瑛

發生した潔白純色雪のやうである雪蓮と名づく、白蓮池の名稱
之に因る。

■試劍石 慈愍泉之東。

有石中分如截者。即試劍

石。列國年間。于將莫邪

。練雌雄劍獻吳王。王劈

石試之。石分爲二。或云

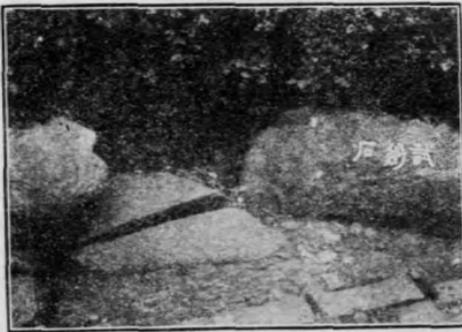
。秦皇掘得吳殉劍而試之

。未知孰是。

▲試劍石 右の泉の東に

ある、石の中央が截然と

分れて居る、乃ち試劍石



虎邱名勝十圖(試劍石)

劍試一痕。秋崖傾。水漸流。如何百年後。
不斬趙高頭。

試劍石 高起

劍斷雲根。殺氣橫。鐵花羞。澀鮮花生。祖
龍莫詫神鋒。利別有會。令白帝驚。

試劍石 馬世奇

香徑生塵。茂苑虛金精。猶想霸圖餘。可
憐說劍終無術。不賜夷光。賜子胥。

試劍石 微輿

白虎驚秦帝。干將去楚王。空餘一片石。
夜夜月如霜。

千人坐 方惟深

虎邱山

である、戰國時代に干將莫邪が雌雄劍を練磨して吳王に獻上し
た、王は之れを以て石を割つたが、截然と二つに切られたと、

また秦皇が掘り出して得

た吳の殉した時用ひた劍

で、之れを以て石を切つ

たとも傳へられてゐる、

何れが眞か何れが僞か判

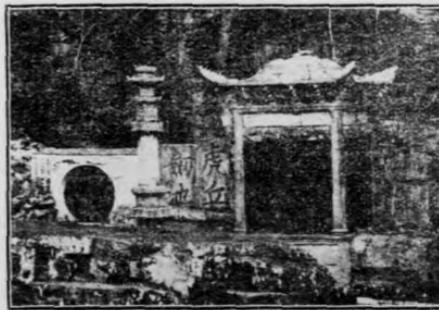
明せぬ。

■二仙亭 二仙亭在千人

石北。中有大石碑二。刊

純陽陳搏二祖師肖像。古

衣古貌。栩栩如生。亭外



(亭仙二) 一十圖勝名邱虎

虎邱山

生公天人師講法花雨墮當時聽法衆
片石千人坐山祇常護持山鳥不敢汚
野人心茫然傲蕩多酒過醉來不肯歸
石上看雲臥

千人坐 范成大

聽經人散鮮花深千百誰能更賞音只
好岸巾披鶴氅風清月白坐彈琴

千人坐 楊備

海上名山即虎邱生公遺蹟至今留當
年設法千人坐曾見岩邊石點頭

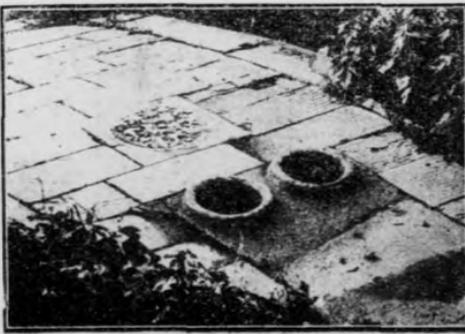
千人坐 高啓

池上盤陀石千人列坐曾如今跌夜月

石柱上。有「昔日岳陽曾顯跡。今朝虎邱再留蹤」之句。爲後人所刊。亦所以誌鴻爪耳。

▲二仙亭 二仙亭千人石の北に在る、中に大石碑が二つある。純陽陳搏二祖師の肖像が刊刻せられてある、古衣古貌、棚々焉として活けるやうである、亭外石柱上に一句あり曰く

昔日岳陽曾顯跡
今朝虎邱再留蹤



(桶吊雙) 二十圖勝名邱虎

惟一山僧。

千人坐

謝縉

林下盤陀石山中不記春佇看無一畝
容坐僅千人雲護平如砥苔封厚似茵
祖筵從廣設懽會在逡巡

千人坐

袁宏道

一片千人石晶瑩若有神劍光銷不盡
留與醉花人

千人坐

陳瑚

盤龍墮馬蹶香塵載酒判花坐月頻春
去秋來一片石朱顏看作

千人坐

周公質

虎邱山

石井 劍池之西。有陸羽石井。井爲亂石堆成。頗具天機。井內有泉。終年不涸。陸羽品爲天下第三泉。信不誣歟。

石井 劍池の西に陸羽

石井がある、井戸は亂石

がうづもつて成つたもの

である、頗自然を備へて

ゐる、井中に泉水が湧き

出でる。年中涸れぬと天

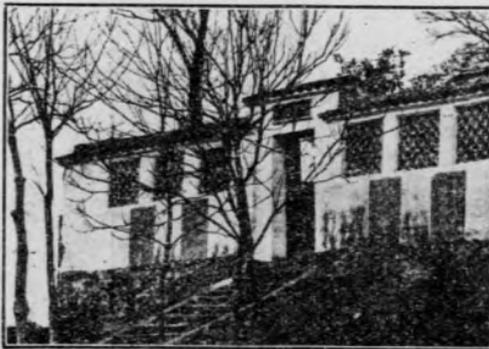
下第三泉の稱がある。

擁翠山莊 由石觀芥殿

。逕遶南行。爲冷香閣。

閣之南。爲擁翠山莊。乃

乃



虎邱名勝圖三十(擁翠山莊)

虎邱山

雨餘松滴翠石上夕陽生池水涵人影
山鐘答鳥聲磧荒元鶴去塔迴白雲平
來往無相識清歌寄遠情

千人坐

蔡堡

翠簇笙歌墜香分羅綺叢江南一片石
秋月在其中蒼蘚虎邱披清泉劍池瀉
點頭豈無情閱遍遊山者

千人坐

翁照

幽尋常得好開懷月冷風清獨舉杯此
景有誰能領略千人石上一人來

點頭石

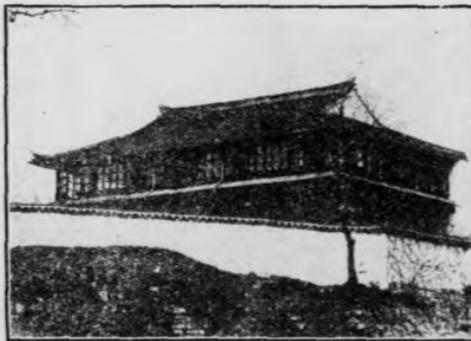
范成大

當年揮塵講何經賺得堅頑側耳聽我

甲申文卿閣學修庭觀察諸賢所建。內有不波小艇。石駕軒。問泉亭等勝。而正中之靈澗精舍。尤饒古意。試品茗題詩其中。樂陶陶也。而遠山在抱。松竹入畫。又豈新建建築物所堪企及乎。

▲擁翠山莊 甲申の歲に

文卿等其他諸士の建立したところである、内に不波小艇がある遠山抱いてあり松竹畫の如しなかくの風雅で外國新建、築物の及ぶところでない、



(關香冷)四十圖勝名邱虎

白吟詩無法說石頭莫作定盤星

點頭石

顧仲瑛

生公聚白石塵拂天花墜可憐塵中人

不解點頭意

點頭石

鄧雲霄

吳王墳蹠虎不及生公石石悟已忘言

虎去無留跡我來千載後訪右一歎息

山門夜寂寥月冷劍池碧

點頭石

張慶孫

聚石峻嶒講座收年年苔蘚自春秋三

乘說盡原無法錯向寒山一點頭

點頭石

鄭宛坡

虎邱山

冷香閣 虎邱禪寺之東南隅。築屋於石壁上者。曰冷香閣。前名望蘇台是。內懸名人書畫。琳琅滿目。東望城郭。歷歷可指。大觀也。

冷香閣 寺の東南隅にある、石壁上に建築した家屋で以前は望蘇台と稱した、内に名人の書畫が多くかかつてゐる、東方を眺めげ城郭を見る、まことに雄大なる望景である。

劍池 二仙亭之後。兩崖劃開。中涵石泉者。傳爲闔閭葬劍之所。曰劍池。壁上題詠甚多。惜年代遼遠。模糊不辨。外有石刻虎邱劍池四大字。爲唐顏真卿書。池之上有雙井橋。下望池水。清可見容。亦一佳境也。

劍池 二仙亭之後、兩崖劃然と開かれてゐる、中涵に石泉あり、闔閭の劍を葬つたところであると云ふ、壁上に題詠頗多い

虎邱山

誰能解妙諦。茲石獨通靈。傳說千人坐。當時一樣聽。

又 前人

當日說何法。我來獨問君。語言原不着。相對靜無聞。

又 前人

日照講臺寂。生公去不還。池蓮久落盡。石亦復應頽。

生公講臺 殷堯藩

暝色護樓臺。陰雲晝未開。一塵無處著。花雨徧蒼苔。

生公講臺 周伯琦

、年代の變遷と共に、今はその佛をこごむるばかりである、外に石刻で虎邱劍池四字、頗る大形の文字である店の顔真卿の書いたものであると云ふ、池の上に雙井橋がある、下を望むと池水がある、姿の映つる程に奇麗である。



(池劍)五十圖勝名邱虎

御碑亭 最高處有虎邱禪寺。寺前有石階五十三級。曰五十三參。取佛典五十三參。參參見觀音之義。內有御碑亭。碑上有乾

生公說法鬼神聽。頑石點頭皆含靈。空
壇草木青不改。只有寶塔鳴風鈴。

生公講臺 高啓

鳥銜天花飛。講罷空山夕。惆悵解談禪。
人那不如石。

又 前人

石立空山豈有情。當年解聽說無生。高
僧去後天花盡。只有閒雲開月明。

生公講臺 王絨

寂滅生公迹。千秋一上臺。月華疑片石。
夜色淨塵埃。佛性因空見。禪關待悟開。
何年逢大士。重爲講經來。

虎邱山

隆手筆。頗雄健。不愧一
世英明主也。

▲御碑亭 最高處に虎邱

禪寺がある寺前の石階が
五十三級、そこで五十三
參と稱する、蓋し佛典五
十三參の意義を取つたの
である。參參とは觀音の義
である、内に御碑亭があ
る、碑上に乾隆帝の手筆

があるが、頗雄健で一世の英明主たるに愧じずである。

■石觀音殿 陸羽井之前有殿。曰石觀音殿。其内石壁峭立。壁



(亭碑御)六十圖勝名邱虎

虎邱山

生公講臺

陸師道

生公講席千人坐。光綠華筵九日杯。寶地自從香海湧。黃花故傍石岩開。池清劍氣雲陰薄。塔靜鈴風雁影迴。紅樹青霜秋萬里。酒醒落日更登臺。

生公講臺

王叔承

佛氏談空來那知。石堪語回首。生公臺。殘經暗秋雨。

生公講臺

程嘉燧

紅亭街日樹參天碧。澗千尋俯洞泉。粉黛穿蘿行閣道。袈裟出竹上樓船。暗塵百處迷。今夕遠曲千場似昔年。

上刻有經典數十行。均係

宋名儒手筆。頗可珍貴。

故老相傳。昔秋香進香。

三笑姻緣。即訂於斯。誠

千古佳話哉。

▲石觀音殿 其前に御

堂がある、壁上に經典數

十行ある宋名儒の筆した

ものご云ふ、昔秋の御祭

りには良縁を結ぶ爲に參

詣者が多くあつたと、

■仙人洞 五十三參之東。荒草中有亂石洞一。曰仙人洞。可容



(殿音觀石)七十圖勝名邱虎

生公講臺

顯夢麟

臺上。天花散。落頻。風來吹。萎不吹。新。誰
言。身後。空堂。自有。笙歌。占。斷。春。

生公講臺

歸莊

當。日。生。公。好。辨。才。雨。花。悟。石。信。奇。哉。雲
巖。已。作。新。禪。寺。碑。字。空。傳。舊。講。臺。

生公講臺

陳基

山。寺。殘。鐘。警。早。秋。碧。烟。洗。月。月。華。流。如
何。大。說。生。公。法。只。有。臺。前。石。點。頭。

白蓮池

范大成

碧。潭。白。石。假。櫻。枝。愛。水。嫌。風。老。更。底。潭
底。中。間。龍。影。臥。一。山。佳。處。沒。人。題。

虎邱山

一。人。行。深。不。可。測。昔。有。賣。橘。人。入。洞。遊。玩。見。有。二。老。棋。戰。方
酣。移。時。即。杳。急。出。洞。而。人。世。間。已。越。數。年。矣。語。雖。無。稽。亦
足。借。酒。餘。茶。後
之。談。資。云。

▲仙人洞 五

十三參の東

荒草中には亂

石洞が一つあ

る仙人洞と云

ふ、一人宛立

行をなし得らるのみ其深さ測り知るを得ずと、その昔柑蜜を賣
るものあり、此洞内に入りて遊んで居ると、二人の老翁が居て



(洞人仙)八十圖勝名邱虎

虎邱山

白蓮池

王世貞

曉風零落滴瑤華。游女爭攀似若耶。若問什公應有解。淤泥元自出蓮花。

白蓮池

王叔承

落盡池蓮白山根。鎖碧篔簹可能明月夜。天女散秋花。

白蓮池

顧夢麟

聞道生公石上苔。白蓮池繞白蓮開。如今只有池邊鶴。雪影還疑趁月來。

驚慈泉

王叔承

年來癡更絕。味得驚慈理。兩耳三千秋。不洗潁川水。

棋を圍はしてゐた。暫らくすると此二人の姿が消えて仕舞つたので驚いて洞から出たと傳へられてゐる、もとより數十年を経た今日僅かに茶話しの材料として置いてよかりう。

樂書十一一則

虎邱 短夜や惜しくも別る虎丘山
異國人袖濡めらせり比翼塚
斷標殿 理科學の力や重し斷標殿
試劍石 試劍石御史の物せし今は夢
枕石 枕石ただきくさへも豔史哉
真娘墓 香をやいて常盤木植えし遊女哉
白蓮池 無垢の花誰れ折りも得ず品高し
點頭石 色卽是空岩も動きし法の道
御碑亭 聖賢の行幸や草もめぐまると
仙人洞 幻覺のあと散らばりし碁石哉
劍池 澄み井の中をそろしき鬼も見ゆ
石觀音殿 縁結ぶ神の恵みや番蝶

五月十四日月子稿

石井

王禹偁

鑿石封。苔百尺深。試茶嘗味。尙知音。唯餘半夜泉。月中留得先生一片心。

石井

司馬允中

百尺寒泉浸崖腹。鮮蝕題名不堪讀。只今此味屬誰論。自把銅餅汲新澗。

石井

顧仲瑛

雲霧春泉碧。苔侵石甃青。如何陸鴻漸。不入品茶經。

石井

張羽

一脈靈源劫外春。蒼苔冉冉石鱗鱗。老僧笑指庭前柏。曾見開山卓錫人。

蘇州之名勝

附錄

蘇州之名勝

(甲) 山

(一) 虎邱山

在城西北七里。一名海湧山。吳王闔閭葬此。相傳葬後三日。有白虎踞墳。故名虎邱。山高一百三十尺。周二百十丈。泉石奇詭。應接不暇。其最勝者爲劍池。闔閭葬其下。以扁諸魚腸等劍殉焉。故名。兩崖劃開。中涵石泉。深不可測。李秀卿品爲天下第一。唐顏真卿書虎邱劍池四字。石刻猶存。前爲千人石。廣可坐千人。爲生公講臺。旁有白蓮池。池中有石名點頭。相傳晉高僧生公說法於此。頑石皆點頭。道旁有試劍石。相傳闔閭於此試劍。

蘇州之名勝

石井 徐賁

來款。生公室。因尋。陸羽。泉。虛。涵。雲。液。淨。
陰。覺。土。花。圓。竹。引。歸。香。積。瓶。分。供。法。筵。
虎。跑。睛。見。跡。龍。伏。暖。淨。澁。錫。影。孤。亭。日。
茶。香。小。灶。烟。師。心。如。定。水。應。悟。趙。州。禪。

石井 周南老

歷覽。劍。池。上。宛。然。古。石。井。四。壁。若。天。成。
鱗。皴。立。蒼。礪。泉。自。石。脈。出。沉。沉。貯。淵。觀。
樹。影。蔭。深。清。茶。香。漱。甘。冷。徘徊。訪。陳。跡。
汲。古。得。修。綆。昔。人。品。第。三。子。今。當。雋。永。

石井 陳毓

四。面。石。為。壁。中。藏。一。脈。泉。深。容。千。尺。綆。

。劍痕可辨。有慈惠泉，為梁高僧慧嚴遺跡。有枕石。生公曾倚

此看經。登五十三參。入

門而左。為清聖祖高宗駐

蹕處。有大吳軒、小吳軒

、平遠堂、梅花樓、仰蘇

樓、雪浪軒、月駕軒海晏

亭、玉蘭房等處。後有浮

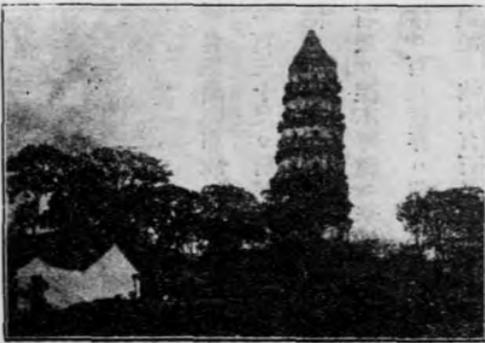
屠七級。隋仁壽九年建。

紅羊遭燬。尚未修復。前

有石觀音殿。殿右有冷香

閣。民國新建。前植紅綠

梅花。登臨可望太湖。山本在田疇中。唐郡守白居易鑿渠築隄。



虎邱塔

冷浸一方天。應是鬼工鑿。定非人力穿。
養花修佛供。養茗結僧緣。解洗心清淨。
難逃貌醜妍。何當乘醉往。一吸頓醒然。

石井 王鑿

翠壑無聲湧。碧澗品題誰。許惠山先沉。
理斷磴。頽垣裏。搜剔松根石。轉邊雲乳。
二林分沅澗。天光千丈落。虛圓間來乘。
滑行多。惻好謝東山。悟道泉。

石井 王寵

會甘寒。鑿水今酌虎邱泉。石乳疑餐玉。
茶經似草元。登臨悲代謝。著作總流傳。
扶醉下山閣。千林落日懸。

蘇州之名勝

以通南北。亦稱白隄。卽今之山塘是也。

(一)天平山

在城西二十五里。支硎之南。視諸山最爲秀靈。山頂有蓮花洞。
又名白雲洞。皆山中最勝處。山皆奇石。環形異狀。可喜可愕。
以草筆峯爲最。峯高數丈。截然立雙石之上。餘爲屏爲籬。或植
或倚。備極奇怪。飛來峯高二丈。上銳下修。微附盤石。前臨崖
谷。大石屋、三面壁立。覆以二大石。小石屋、一石覆之。又小
巖有蓋。斜蔽其頂。俗名頭陀崖。又有五大石、臥龍峯、巾子峯
。皆山中奇跡。山半有白雲泉。爲吳中第一水。石壁中別有一泉
。注出如綫。曰一綫泉。宋僧壽老始發之。有古松、嚶蚪如蓋。
曰華蓋松。他如白龍門、穿山洞、蟬蛸石、龍頭石、靈龜石、釣
魚石、皆奇絕。南址白雲寺。今爲范文正公功德院。清高宗臨幸

蘇州之名勝

石井 孫七政

古甃。漚。寒。泉。千。年。自。澄。澈。惟。有。山。中。人。
夜。汲。石。底。月。

石井 王世貞

康。王。谷。瀑。中。冷。水。何。似。山。僧。屋。後。泉。客。
至。試。探。禪。悅。味。玉。圓。初。碾。浪。花。圓。

石井 張鳳翼

清。和。風。日。好。輕。舸。棹。迴。川。仙。掌。攜。匡。葬。
禪。林。開。古。泉。雲。寒。花。豈。外。烟。颺。石。牀。前。
桑。宇。高。臨。遠。空。令。憶。往。年。

石井 朱德潤

東。望。吳。山。紫。翠。纒。憑。欄。忽。坐。小。吳。軒。石。

四

其地。范公之祖墓在焉。其西有鉅架峯。其後羣石林立。名萬笏朝天。

(一)靈巖山

在城西三十里。高三百六十丈。一名硯石山。產石可爲硯。故名。闔閭之館姓宮址也。山有石馬。望之如人騎。南有石鼓。俗謂鳴卽兵起。山之西北絕頂。爲琴臺。范成大謂下瞰太湖及洞庭兩山。清翠叢碧。在白銀世界中是也。臺下有大偃松。身臥於地。兩頭崛起。交蔭不見根所自出。吳人以爲奇賞。比年雷震。一枝已瘁。自臺而東。爲走馬街。山前十里有探香徑。斜橫如臥箭。山頂之地有葵蕪。夏能去熱。秋則去寒。水至旱不竭。井二圃曰吳王井。八角曰智積禪師井。井之陽爲涵空閣。其西南石壁削拔。曰佛日巖。其中平坦處爲靈巖塔。塔前石壁聳起。爲靈芝石。

橋。楊柳。半塘。寺。修竹。梨花。金氏園。

小吳軒 顧阿瑛

雲沒羣山盡。天垂落日懸。憑虛俯城郭。

隱見一絲烟。

小吳軒 周伯琦

小吳軒。高出半天。吳城俯見一點烟。綠

陰拂簷山寂。寂空中靈巖。時冷然。

小吳軒 高啓

丹霞結飛甍。迴出巒嶺上。平招西山雲。

淺泛車海浪。五湖水如杯。歸棹安可放。

當年笑夫差。乃欲百里王。吾觀大千界。

等彼一塵相。始悟軒中僧。非真亦非妄。

蘇州之名勝

循塔南西上有小斜廊。為響屨廊。亦曰鳴屨廊。圖經云。吳王以

椶梓籍地而虛其下。西子輩行則有聲。故名。東為百步街。石龜

、石羅漢在焉。又石上男女足跡。俗呼吳王西施足跡。街之南為

西施洞。圖經續記。吳王囚范蠡處。洞右有牛眠石的前為出洞龍

、貓兒石。東西為二划船隴。蓋吳王渚水以戲龍舟之所。其下為

妙湛泉。明萬歷初太倉士人曹允浚得之。此山數十里外。望之即

可辨。高啓云。靈巖拔奇挺秀。若不肯與衆峯列。允多奇石。嘉

靖後屢經構采。遂多殘毀。清聖祖。高宗南巡。皆駐蹕其地。行

宮在山嶺。

(一) 鄧尉山

在城西南六十里。錦峯山西南。漢鄧尉隱此。亦名光福山。以地

名光福里也。前瞰太湖。風景極佳。山多梅樹。花時一望如雪。

蘇州之名勝

小吳軒 前人

雲結香臺出半空。吳天目盡五湖東。消
沉今古知何處。日落長洲沒斷鴻。

小吳軒 張憲

何處俯姑蘇。層軒列畫圖。玉墀行殿草
珠樹。寶園鳥。蟻垤觀。翠望牛。澗視五湖。
試憑空。海眼一覽盡。句吳。

小吳軒 顧夢麟

大海何年湧。此峯一卷常礙太虛空。問
君眼底吳猶小。軒又安將若箇中。

小吳軒 姜實節

晝長春坐倚。迴欄久矣。春情事不干屋

山之東麓二里。有妙高峯。下有七寶泉。西有壽巖泉。山之西北

曰龜山。光福塔在焉。俗名塔山。山北有虎山。中通一溪。跨以

石梁。名虎山橋。其西南有風鳴岡。岡下有至理山。又有苑岡山

、石帆山、褚山、邢山、長山、游城山。皆附鄧尉山。

(一)玄墓山

在鄧尉山南六里。相傳東晉青州刺史郁泰玄葬此。故名。初明高

峯和尚居之。名萬峯山。人謂吳之山唯玄墓最僻亦最奇。面湖而

險。丹崖翠閣。望之如屏。晉鄧尉而來。法華障其前。銅井

青芝迤邐其右。游龍界其左。尤奇在絕頂。一登則洞庭諸山。悉

陷伏於湖。而湖波混茫。蕩為一色。山有聖恩寺、喝石寺。四南

有八德泉。水如沸珠。又名沸珠泉。寺後奇石。俗謂之真假山。

元天順間於土中露見稜鏗。扣之鏗鏘。遂如剔濯。巖巖洞越。巧

角。泉。鳴。新。水。細。山。閒。僧。定。夕。陽。寒。已。拚。
世。路。愁。中。過。要。寫。題。名。石。上。刑。多。謝。美。
人。類。乞。句。老。夫。詩。思。近。來。難。

小吳軒

郭孫順

日。暖。風。柔。稻。意。遊。攜。筇。來。訪。上。方。幽。萬。
家。烟。火。當。窗。見。百。里。山。嵐。倚。檻。收。巨。刻。
尚。傳。唐。世。代。叢。祠。誰。省。晉。風。流。菜。花。黃。
遍。南。山。北。又。爲。春。殘。動。客。愁。

小吳軒

韓 騏

獨。凭。危。欄。信。小。吳。寺。鐘。初。動。日。將。晡。天。
圍。萬。灶。蜂。房。密。地。擁。高。城。懷。埴。孤。甫。氣。
忽。收。全。露。塔。雲。陰。重。合。半。遮。湖。劇。憐。金。

蘇州之名勝

若天成。後漸湮沒。清康熙間。積雨山泉衝激。復有石露於大悲
壇東。寺僧因而搜之。得石湖盧熊所題神獅出岫、海湧門、汲硯
泉、涵輝洞、峭壁巖、螺髻峯、流雲洞、凌空橋八景。清聖祖、
高宗。皆巡幸。山半有五雲洞。顧天敘所闢。東有米圃山。東麓
爲柴莊嶺。米圃山迤南爲錢家砌。又東南爲台山、周山。西爲石
牌山。又西爲孫家、蟲頭諸山。漸入於湖。迤南爲竺山。亦名竹
山。南爲法華山。一名鉢盂山。亦名烏鉢山。又南爲漁洋山。二
山西南北三面皆在湖中。峯隴幽闕。遊者鮮至。

(一)穹窿山

在城西南六十里。卽赤松子所取赤石子脂之地也。山東西兩嶺相
趨。產自然銅。又曰銅嶺。山頂方廣可百畝。有煉丹台。昇仙台
皆赤松子遺跡。又三茅峯頭如浮笠。俗呼箬帽嶺。壘石爲竈。名

七

蘇州之名勝

虎消沉後。眼底山川失伯圖。

小吳軒

蔣重光

縹緲高軒一望際。碧欄干外夕陽斜。萬家烟火迷晴樹。幾點樞帆帶落霞。古澗已虛騰劍氣。講臺無復雨天花。晚來欲叩禪扉宿。林際娟娟逗月華。

小吳軒

曹仁虎

綠樹歇。疎雨人家春鳥鳴。斷雲諸寺出斜日。半山明。古澗尋苔色。空林來梵聲。劍池今夜月。還照闔閭城。

真娘墓

白易居

真娘墓。虎邱道不識。真娘鏡中面。唯見

國師龕。半山有石膝痕。相傳茅君禮斗處。蔭印。中注水不涸。名雙蔭泉。產石蟹如錢大。又有柱杖泉。大旱不竭。法雨泉。下注石堰。東嶺下有盤石。高廣丈許。相傳朱買臣讀書其上。今號為讀書臺。北有紫石山。鳳凰山。西為紫蔭塢。百丈泉。清高宗南巡。臨幸其地。

(一) 岩巒山

在城西南十五里。俗稱獅子。以形名。王僚葬此山。山上有石巷。南有大石相傳為墜星。今其東有落星澗。俗傳禹治水時。令童男童女入太湖。引出此山。欲以填水至鶴邑。不肯進。因又名鶴阜山。後有鈴山。左曰索山。皆以獅子得名。山南頂有巨石二。云是獅子兩耳。自元以來。鑿石殆盡。

(二) 支硎山

真娘墓頭草霜摧桃李風折蓮真娘死時猶少年脂膚美手不牢固世間尤物難留連難留連易銷歇塞北花江南雪

真娘墓

張祐

佛地葬羅衣孤雲此地歸舞爲蝴蝶夢歌謝伯勞飛翠髮朝雲斷青蛾夜月微傷心一花落無復戀春暉

真娘墓

沈亞之

金釵淪劍壑茲地似花臺油壁何人值鏡塘度曲哀翠條長染柳香重欲薰梅但道行雲去應隨蝶夢來

真娘墓

李商隱

蘇州之名勝

在城西二十五里。晉高士支遁憩遊其上。平石爲磻。故因支遁以支磻爲號。一名報恩山。以昔有報恩寺也。山有石室、寒泉。遁詩云。石室可蔽身。寒泉濯溫手。相傳遁冬居石室。夏隱別峯。所遺故物。有鉄柱丈。鐵燈籠之屬。又有放鶴亭、白馬磻、馬蹟石。皆以遁得名。舊有南峯寺。及中峯、北峯二院。北峯、宣德間移於雞窠嶺。中峯、在寒泉上。又有楞伽院。南峯、一名天峯。即唐支山院也。傍有待月嶺。嶺下有碧琳泉、南池、新泉、馬坡。坡南三巨石屹立如門。西連危峯。東臨絕壑。中猶振泉然。又牛頭峯在寺門下。盤院、空谷。化成、法螺諸菴。景皆絕勝。清高宗南巡。臨幸其地。

(一) 楞伽山

在城西南十四里。吳山東北。又名上方山。上爲楞伽寺。有浮屠

九

蘇州之名勝

虎邱山下劍池邊長遣遊人嘆逝川骨
樹斷絲悲舞席出雲清梵想歌筵柳眉
空吐效顰葉榆莢還飛買笑錢一自香
魂招不得祇應江上獨嬋娟

真娘墓

羅隱

春草荒墳墓萋萋向虎邱死猶嫌寂寞
生肯不風流皎鏡山泉冷輕裙海霧秋
還應伴西子香徑夜深遊

真娘墓

楊備

冰肌玉骨有遺妍粉作嬌雲黛作烟知
有香魂埋不得夜深岩底月中仙

真娘墓

周弼

七級。東南麓有丁家山。唐丁公著父喪。負土作冢。故名。北為寶積山。寶積寺在焉。又北為吳王郊台。東北為茶磨嶼。東麓為石湖書院。東南麓有普陀巖、石池、石梁。清高宗南巡。臨幸其地。茶磨北四里曰黃山。諸峯高下相連。俗稱筆格山。隋志載王世充破劉元進坑其衆於黃亭欄。疑卽此。其西山之半。有二石洞。深可三四丈。俗名虎洞。

(一) 堯峯山

在城西南十六里。堯時洪水汎溢。吳人避此。故又名免水山。有青輝軒、碧玉沼、多景巖、寶雲井、白龍洞、觀音巖、偃蓋松、妙高峯、東齋、西隱十景。後廢及半。人因取露禪菴、千人坐、響泉、松岡、竹徑以足之。俗又以壽聖菴為上堯峯。露禪菴為中堯峯。輿福菴為下堯峯。山半有靈鷲嶺。嶺下石鴨中產文石。其

青鳥傳堂游海。遲亂山衰草。葬蛾眉錦囊銷歇。餘香在狼藉春風豆寇枝。

真娘墓

顧仲英

何處真娘墓。雲埋斷石根。夜深風雨急。誰喚海棠魂。

真娘墓

高啓

金釵葬小墳。楊柳寺前村。已斷花間信。空歸月下魂。出鴛留曲韻。草露帶啼痕。車馬逢寒食。還來酌酒尊。

真娘墓

前人

小冢埋香上翠微。嬌魂幾度月中歸。遊人寒食應惆悵。草色青青似舞衣。

蘇州之名勝

東南有寶華山寺。有伽藍泉。又有紫薇塢、瑞雲塢、褒忠嶺、青霞嶺。東有長旗嶺。臨慈塢。又東為吳山。吳越廣陵王子文奉建吳山院於此。故名。其南有昇猶山、桃花塢。漫衍六七里。臨太湖白陽灣。與吳江分界。陰雨彌日。則煙霞瀾漫。望之若白浪中浮。露青峯也。至風清月明。其氣凝結不散。疑井中龍嘘所出。雲泉所由名也。

(一) 陽山

在城西北三十里。一名秦餘杭山。越入吳。夫差晝夜馳走。達於秦餘杭山下。越兵追至。遂擒之。其地即所謂干隧也。山高八百五十餘丈。逶迤二十餘里。大峯一十有五。而箭缺最高。相傳秦皇射於此。故下有射瀆。箭缺之傍。有巨人跡。長五尺許。下有文殊寺。寺內石井。大旱不涸。有香爐石高聳數丈。有白龍塢。

蘇州之名勝

真娘墓

蘇平

不見當時窈窕娘。空遺孤冢對斜陽。淒涼夜雨悲瑤瑟。埋沒春風怨錦囊。坟上不生連李樹。人間那得返魂香。分明蘇小西陵路。草綠藤蕪易斷腸。

真娘墓

陳祚明

莫問真娘墓。平原蔓草荒。鶯疑絃管滑。花學綺羅香。絕世應難得。千秋為爾傷。惟餘嗚咽水。長日繞河梁。

真娘墓

張慶孫

芙蓉秋水夕陽灘。雜沓笙歌倚木闌。醉後離情巫峽夢。白雲紅葉一環寒。

其前有龍湫。右徑千尺。深亦如之。白龍廟在焉。東北有白鶴山。

以丁令威宅名。丹井尚存。今名澄照山。山北大石甃出如蓮花。

。上建佛廬精舍。皆架巖壁下。有雲泉。水自石上瀉納小池。因

建庵名雲泉。自此一支東北過金芝嶺。曰管山。亦曰灌山。西為

陽抱山、青山、寒山、西北彭山。西南溫山、圓山。其北竹青塘

。又北雞籠山。以形似雞籠故名。山有洞。深不可測。有探者其

去甚遠。燭盡而返。上聞風濤舟艦聲。疑在太湖下也。東南曰象

山。即福壽。盤迴不絕。而爬山嶺在其間。象山之北。為南爪山、

北爪山。陽山西北十里。有徐侯山一名卑猶。越王葬夫差處也。

(一)香山

在城西南七十里。北連穹窿。南近太湖。脈與胥山接。吳王種香

於此。遺美人採之。故名。下有採香溼。通靈巖山。今名箭溼。

真娘墓

濮 滌

芳草離離夕照殘。真娘墓上晚風寒。十年翻盡江南曲。無數琵琶月下彈。

真娘墓

汪懋麟

真娘古墓已潛移。片石空教紫客思。嘆息風流今忽盡。行人何處更題詩。

真娘墓

陳玉蓮

不見真娘墓。祠堂畫棟開。可憐今夜月。猶照故山梅。別夢波俱逝。尋芳鳥自來。一坯爲未。莫誰與護蒼苔。

真娘墓

呂櫟仁

隴色傾城風。舊聞依然。坏土對斜暉。香

蘇州之名勝

山北有名上園下園者。皆吳王藝花處也。西南數里。有黃茅山。臨太湖。

(一) 胥山

在香山東南太湖口。今名清明山。吳王殺子胥投之江。里人立祠江上。因名胥山。其西麓長而銳。土人呼爲西上方。園閭胥造九折路。以遊胥臺。望太湖。胥臺、卽胥山也。

(二) 橫山

在城西南十五里。四面皆橫。故名。山有七墩。俗稱七子山。背臨太湖。若箕踞之勢。又名踞湖山。吳越錢氏。葬忠獻王元璋於此。建寺。其趾曰薦福。又名薦福山。山有五塢。曰芳桂塢、飛泉塢、修竹塢、丹霞塢、白雲塢。臨吳控越。實吳時要地。隋開皇中。胥遷郡於橫山東。亦以是爲屏蔽云。

蘇州之名勝

魂。應。聽。生。公。法。舞。袖。歌。衫。付。白。雲。

真娘墓

沈德潛

千。古。銷。魂。處。高。原。葬。舞。帶。松。間。蘇。小。墓。
花。下。薛。濤。墳。名。自。詩。人。得。山。從。霸。主。分。
講。堂。聽。法。後。應。已。斷。行。雲。

真娘墓

周準

鏡。梵。森。沉。地。偏。傳。紅。粉。埋。春。心。繁。草。石。
豔。思。冷。雲。岸。柳。色。疑。眉。翠。鶯。啼。似。曲。諧。
香。魂。如。結。侶。應。共。泰。娘。偕。

真娘墓

薛雪

草。色。青。青。鎖。野。塘。登。臨。人。自。憶。真。娘。魚。
腸。薊。業。誰。回。首。半。在。笙。歌。半。夕。陽。

(乙) 園

(一) 留園

在閶門外五福路。游資每
人小洋一角。為明太僕徐
聞卿東園故址。清嘉慶初
。洞庭劉蓉峯就其地建寒
碧山莊。人稱劉園。光緒
二年。
為常州盛旭人所得。大加
修葺。易名曰留園。入門
曲折進。有涵碧山房。署
曰胸次廣博天所開。極寬



留 園

真娘墓

彭 綰

余拜五人墓。因之楊柳村。東風綠小冢。
蝴蝶。弔香魂。清梵流花。缺朽株。桂斧痕。
譚錄蓬頭。在一去。灑殘尊。

楓橋

張 繼

月落烏啼霜滿天。江楓漁火對愁眠。姑
蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船。

楓橋

程師孟

晚泊橋邊寺。迎風坐一軒。好山平隔岸。
流水漫過門。朱舫朝天路。青林近郭村。
主人頭似雪。怪我到多番。

楓橋

胡 埜

蘇州之名勝

敞。臨荷花池。池蓄大種金魚。罌以九曲橋。橋有亭。署曰滌滌。

想。池之西。岸石爲山。桂花甚繁。中覆一軒。署曰聞木犀香。

山頂有可亭。山陰有半野艸堂。向東爲栢木廳。署曰藏修息游。

庭前疊石。極怪偉。廳旁有亭。名佳晴喜雨快雪。對面有屋。署

曰洞天一碧。由揖峯軒入東園。有冠雲、岫雲、瑞雲三湖石。奇

特險峻。得未曾有。尤以冠雲爲最。南有四面廳。額曰奇石壽太

古。北有樓。額曰仙苑停雲。皆爲園中最勝處。全園經營。曲折

委婉。應接不暇。無一覽無餘之憾。而泉石之勝。花木之美。樓臺

亭榭之幽勝精緻。允推花園之冠。

(一) 西園

在留園西。卽戒幢寺之放心池。其入門處。署曰西園一角。園以

放生池爲勝景。上駕曲橋。中有湖心亭。額曰日照潭心。池蓄魚

蘇州之名勝

朝辭海湧千人石。暮宿楓橋半夜鐘。明日館娃宮裏去。洞庭呼起一帆風。

楓橋

郭附

師子山雲漠漠。越來溪水悠悠。鐘到客船未曉。月和漁火俱愁。咫尺橫塘古塔。連綿芳草長洲。一老儵然自在。時時來繫扁舟。

楓橋

范成大

朱門白壁枕灣流。桃李無言滿屋頭。牆上浮圖路旁。喚送人南北。管離愁。

楓橋

陸游宿

七年不到楓橋寺。客枕依然半夜鐘。風

肅甚多。游人投以餅餅。

麋聚爭食。頗有可觀。池

東有四面廳。西有軒。皆

精緻寬敞。此外石壘田圃

亦雅好。而柳暗花明。

鳶飛魚躍。此中大有真趣

焉。

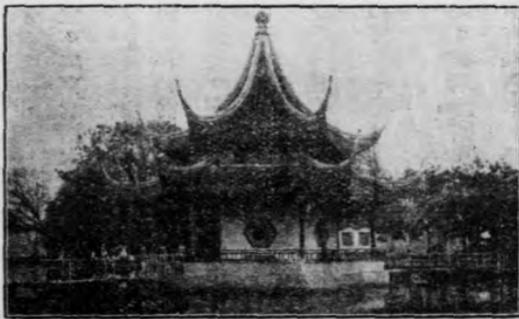
(一)拙政園

在婁門大街。宋元為大宏

寺。明御史王獻臣因其遺

址營為別墅。清初歸相國

陳遴。後沒入官。為吳三桂壻王永甯所得。同治八年。改為八旗



西園

月未須輕感。慨巴山此去尚千重。

楓橋

薛季宣

短篷負長虹。破籬挂明月。風馬塵中生。
天幕波中出。高城多隱映。遠岫撥羅列。
少小泛吳江。始識仙凡別。

楓橋

釋英重

晚泊楓橋市。冥搜憶舊游。月明天不夜。
江冷水先秋。岸曲依漁艇。林低出戍樓。
堪嗟名與利。白了幾人頭。

楓橋

張元凱

楓橋秋水綠無涯。楓葉滿樹紅於花。萬
里之行纔十里。闔閭城頭尚堪指游子。

蘇州之名勝

奉直會館。故今日之園。

不過當時一部分耳。入門

有古藤。爲文衡山手植。

園中有遠亭堂、聽香深處

、繡綺亭、香洲、藕香榭

、擁翠亭、玲瓏館諸築。

園多老樹。夏日清陰可愛

。疊石亦有玲瓏者。又有

連理寶珠山茶。花時猩紅

奪目。吳梅村曾作長歌記

之。

(一) 怡園



園 政 拙

蘇州之名勝

尊前淚溼衣。離心已逐片帆飛。酒醒。忘卻身為客。意欲元同送者歸。

楓橋

高啓

畫橋三百映江城。詩裏楓橋獨有名。幾度經過憶張繼。烏啼月落又鐘聲。

楓橋

前人

紅葉寺前橋。停君晚去橈。醉應忘世難。歸不計程遙。山隱初沈日。風吹欲上潮。離魂來此處。還似壩陵銷。

楓橋

前人

遙看城郭尚疑非。不見青山舊塔微。官秩加身應謬得。鄉音到耳是真歸。夕陽

在護龍街。顧子山所築。入園有一軒。庭植牡丹。署曰瓊鳥飛來。軒東有屋如舟。署曰訪齋。賴有小溪山。其前三面環水。左則蒼松數十幹。上有閣曰松嶺。可眺遠。繞廊東南行。有石壁數仞。築亭而之。名曰面壁。又南行。則桐蔭翳然。中藏精舍。名曰碧梧棲鳳。又東行。梅樹數百。素豔成林。後臨荷花池。石橋三曲。紅欄翠蓋。相映成趣。其前曰梅花廳。廳西鑿坏於垣。曰遯窟。窟中有室。署曰舊時月色。東南為雪亭。又東為歲寒草廬。有石笋數十枝。蒼實可愛。北為拜石軒。庭有奇石。佐以古松。又北為坡仙琴館。以藏東坡琴也。右有石似老人。偃僕而聽琴。築室其旁。曰石聽琴室。西北行有芍藥臺。牆外有竹徑。逕徑而南。修竹盡而叢桂見。一亭署曰雲外築婆娑。亭前即荷池也。循池而西。曲折登山。上有亭曰螺髻。自左而下。得一洞。有石作大

寺掩。暖鳥在秋水。橋空乳鴨飛。寄語里
閨休。復羨錦衣。今已作荷衣。

楓橋 前人

煙月籠沙客未眠。歌聲燈火酒家前。如
何纔出圍門宿。已似秦淮夜泊船。

楓橋 前人

故人當日遠登畿。此地停舟醉落暉。漸
愧臨河舊攀柳。尙留青眼看人歸。

楓橋 謝晉

山寺煙初暝。江村月又生。辭家無十里
不寐。到三更。犬逐漁鐘吠。鐘催客棹行。
從茲去。鄉土甯得是吳氓。

蘇州之名勝

士形。是曰慈雲洞。洞外有桃花。是曰絳霞洞。園東南多水。西
北多山。爲池有四。皆曲折可通。其結構之佳。非胸有邱壑者不辦
也。

(一) 遂園

在蘇家花園。後門在申衙前。游資平常銅圓五枚。園本清康熙時
巡撫慕天顏別墅。旋歸席氏。其後畢尙書沅割其半。半歸滇人劉
氏。卽今遂園也。有綠天深處、映紅軒、容閑堂、琴舫諸築。其
土山。花木甚繁。池頗廣。所植荷花。名層層樓。頗名貴。池上
有橋。曲折可通。

(二) 半園

在倉米巷。溧陽史偉堂所築。游資銅圓五枚。有精若艸堂。君子
居、四宜樓、雙蔭軒、三友亭、不繫舟等建築。有池有山。疊石

十九

蘇州之名勝

楓橋

元文發

輕。雲。駁。日。江。村。暮。西。風。短。棹。寒。山。路。去。
時。柳。色。綠。含。煙。歸。來。楓。老。紅。棲。樹。

楓橋

郭諫臣

落。日。楓。橋。路。船。窗。暮。雨。昏。秋。蘋。擁。沙。渚。
霜。葉。墜。離。根。山。寺。炊。烟。起。江。村。宿。鳥。喧。
臨。風。思。往。事。獨。坐。暗。銷。魂。

楓橋

朱彝尊

初。月。開。平。林。繁。星。羅。遠。戍。驚。禽。沙。上。鳴。
漁。子。夜。深。語。遙。聞。歌。吹。聲。暗。入。楓。橋。去。

楓橋

徐崧

石。橋。高。帶。驛。樓。平。擾。擾。南。征。與。北。征。買。

亦玲瓏可喜。

(一)滄浪亭

在三元坊。為蘇子美舊宅。蓄水數十畝。傍以小山。宛委高下。互相映帶。南為明道堂。折而西為五百名賢祠。祠南為翠玲瓏亭。北為面水軒。靜吟藕花水。樹皆臨水。徐如瑤華境界。聞妙香室、見心書室、清香館等。各就地形結構。極自然之妙。洵吳中勝境也。

(二)獅子林

在潘儒巷。與畫禪寺接壤。湖石之玲瓏奇偉。允推吳中第一。登臨其間。盤旋宛委。有迷離縹渺之觀。相傳元圭正間。僧天如惟則。與倪元鎮等共商壘成。俗傳為倪雲林所構。誤也。其中如獅子峯、含暉峯、吐月峯、臥雲室、問梅室、立雪堂、指柏軒、玉

客帆橋連樹影。庵僧鐘鼓和經聲。天邊
雲冷斜陽。滻雪後江深。急水情放曠。一
身何所擊。劇憐入口累開情。

楓橋

前人

乍寒乍暖。客招提一夜。懷人笠澤。西窗
外。雲昏濛濛。礎空中陰。暗壓燈低。田家
薄暮。牛纔放竹院。侵晨鳥亂啼。幾度相
尋。多不遇白頭。烟水兩淒淒。

楓橋

董靈預

落日一尊酒。風塵此地看。嗚歌今夜月
燈火。萬家寒。珠樹何年古。楓林幾處丹
故鄉。憑夢繞。峯影碧。瓊玩。

蘇州之名勝

鑑池、水壺井、修竹谷、大石屋等。皆爲勝景。山上有大松五。故又名五松園。今歸貝氏。

(一) 環秀山莊

在申衙前。卽汪氏耕蔭義莊。不需游資。但須有人介紹。園本爲清相國孫補山舊宅。道光年。始歸汪氏。燬石成山。望之一小邱耳。穿越其間。則曲折不盡。似入八陣圖中。誠佳構也。東有亭。署曰半灣秋水一房山。西有亭。曰問泉。北曰補秋舫。庭植葵尾一本。春來發花甚盛。舊有飛雪泉。淤塞已久。近年始疏通之。

(丙) 殿

(一) 大成殿

在盤門內。護龍街南府學內。宋范文正公建。祀孔子。歷代修築。

蘇州之名勝

楓橋 殷麗

去年江上逢君別，柳絮飛殘二月天。
今日橋邊尋我去，麥秋寒泛一簾烟。
餘生買藥因投市，旅泊攜詩偶放船。
共醉狂吟，應不惜歸來探取杖頭錢。

楓橋(一首) 沈文憲

野宿隨寒雁，辭家第一宵。
星星漁火亂，知是泊楓橋。

柝響已深更，鄰舟人語歇。
不忍使安眠，貪看故山月。

楓橋 吳蔚光

眼色綠為煙，染我東塘路。
斜月浸迴波。

規模宏壯。逢丁祭開放。龍門下所產薄荷。形如龍頭。名龍腦薄荷。移植他處即變形。為前清貢品。殿上蝙蝠繁殖。啾啾之聲不絕。其羹名夜明砂。入痧藥。亦為蘇地特產。

(一)三清殿

在城中玄妙觀內。建於宋淳熙間。有匾曰妙一統元。筆勢壯穆。相傳金元朮所書。中間供三清神像。都五丈金身。柱皆用石。滿刻神號。前有露臺。三面石欄。外面皆刻圖畫。神像旁供六十花甲星宿。香火不絕。

(丁)臺

(一)姑蘇臺

在縣西南三十里橫山西北麓姑胥山上。亦名胥臺。闔閭經營九年始成。高三百丈。望見三百里外。作九曲路以登臨。越入。吳焚

繁星挂。疏樹燈光明。欲飛。船聲細。如語
滅。獨。間。春。鐘。清。夢。落。何。所。

楓橋

李繩

又復。恩。恩。賦。遠。征。鳥。啼。霜。月。若。爲。情。寺
鐘。漁。火。楓。橋。泊。已。是。思。家。第。一。程。

楓橋

吳琦

上方。山。下。路。一。泛。石。湖。船。秋。月。清。如。此
吾。心。自。冷。然。菰。花。紫。客。棹。漁。火。亂。江。烟
此。夕。楓。橋。泊。吟。鐘。中。酒。眠。

楓橋

馬元勳

秋。氣。入。淒。清。江。楓。照。眼。明。寒。霜。侵。月。色
殘。夢。落。鐘。聲。水。閣。吳。娘。曲。風。橋。估。客。程。

蘇州之名勝

之。今。僅。有。山。耳。

(戊) 亭

(一) 滄浪亭

在盤門內三元坊。宋蘇舜卿建。後歸韓世忠。元明均廢爲僧寮。
嘉靖間。改爲韓蕲王祠。浮徒文瑛於大雲菴旁。復建滄浪亭。清
康熙間。巡撫宋學復構亭於土山上。紅羊之役又毀。清同治間。
巡撫張樹聲。仍建亭原所。並建五百名賢祠於亭之西南。其中亭
臺軒榭。皆臨水構築。荷葉甚繁。花時清香遠聞。游蹤不絕。

(二) 金閶亭

在閶門。漢時建。傍川帶河。署曰金閶。朱買臣曾逆旅此舍。今
不可考。

(己) 廟

二十三

蘇州之名勝

災傷連數郡米價幾時平。

楓橋

王昭嗣

古寺江村無十里。楓葉紛紛亂紅紫。一
杵霜鐘度水來。磔磔驚鴻拍波起。此夜
城西抱影眠。烟波蕭瑟五湖船。何人其
語孤篷下。消遣鄉愁暮雨天。

楓橋

孫觀

白首重來一夢中。青山不改舊時容。鳥
號日落橋邊寺。欹枕猶聞半夜鐘。翠木
蒼藤一雨家門依古柳。抱溪斜古城流
水。參差是不見。元都舊日花。三年瘴海
臥。炎宵夢隔青楓。一水遙萬里。歸來悲

(一) 關帝廟

在護龍街周太保橋北。宋淳熙中建。清順治九年。敕封忠義神武
關聖大帝。乾隆三十三年。敕封忠義神公靈佑關聖大帝。嘉慶十
二年。敕封忠義神武靈佑仁勇關聖大帝。道光九年。敕封忠義神
武靈佑仁勇敢顯關聖大帝。春秋二仲月及五月十三日設祭。民國
成立。與岳武穆同祭。

(一) 城隍廟

在城西南隅流花坊北。吳赤烏二年建。宋時封忠安王。加封順應
。加封威顯。加封英濟。明時封威靈公。清光緒御賜府城隍神崇
臺鞏護匾額。加封沛澤。

(一) 水仙廟

在閶門外雁宕村南。唐末建。一在胥門外日暉橋南。宋紹熙中建。

故物銅駝埋沒草齊腰。

楓橋

俞桂

湖水相連月照天。雁聲嘹唳攪人眠。昔年曾到楓橋宿石岸。旁邊擊小船。

楓橋

湯仲友

出城才七里。地僻罕曾過。孤塔臨官道。三門背運河。鐘鳴驚鳥宿。牆矮入漁歌。醉裏看題壁。如今張繼多。

楓橋

王衡

燈合帆影亂。鐘雜市聲昏。杳杳竹深處。蕭蕭僧倚門。獨將殘雪色。遙對遠山言。又聽鳥號急。江城送客喧。

蘇州之名勝

○清咸豐十年並燬。同治年重建。

(一) 火神廟

在清嘉坊東。明萬歷間建。

○咸豐十年燬。同治六年重建。

重建。

(庚) 寺

(一) 報恩寺

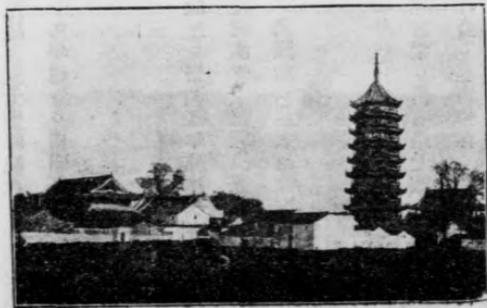
在府城北陞。俗稱八寺。

古為通玄寺。吳赤烏中。

孫權母吳夫人捨宅建。唐

大順二年。為淮西賊孫儒

焚燬。同光三年。錢鏐重



北 寺 塔

蘇州之名勝

寒山寺

唐寅

金。閨。門。外。楓。橋。路。萬。家。月。色。迷。烟。霧。誰
聞。更。殘。角。韻。悲。客。船。夜。半。鐘。聲。度。樹。色。
高。低。混。有。無。山。光。遠。近。成。模。糊。霜。華。滿
天。人。性。冷。江。城。欲。曙。聞。號。鳥。

寒山寺

王穉

古。寺。西。邊。路。青。山。滿。目。中。石。龍。從。作。雨。
江。鶻。常。鳴。風。市。近。僧。難。定。泉。慳。花。不。紅。
燭。憐。門。外。路。塵。土。暗。江。楓。

寒山寺

陸鼎

寺。樓。直。與。衆。山。鄰。魚。米。東。南。此。要。津。獨
惜。牙。郎。趨。利。市。不。聞。漁。火。感。詩。人。絕。無。

建。舊有塔十一層。梁僧正慧建。宋元豐時經火。寺塔並燬。僧
大圓建塔。僅九層。紹興二十九年建寺。自明迄今。屢閱興廢。
猶爲郡中捨寺之冠。

(一) 戒幢寺

在留園馬路東。爲明徐太僕故址。崇禎八年施漢捨寺。咸豐十年
燬。清光緒初。僧廣慧募資建羅漢堂。供羅漢五百尊。爲狀不一
。又有千手觀音像。高四丈。民國初。建大雄寶殿。莊嚴輝煌。
冠絕吳中。

(二) 寒山寺

在閶門外楓橋。初名妙刹。建於梁。舊有塔七級。咸豐十年。與
寺同燬。清末。蘇撫程德全修葺。惟塔無存。殿有寒山捨得二尊
者碑像。及唐寅文徵明所書石碑。寺舊有巨鐘。明嘉靖間物。爲

逆。旅。知。歸。客。安。問。寒。巖。舊。廬。真。一。自。鐘。
聲。響。清。夜。幾。人。同。夢。不。同。塵。

寒山寺

姚配

杖。藜。踏。破。蘚。痕。斑。古。寺。蕭。條。未。掩。關。落。
葉。滿。廊。僧。不。見。空。餘。漁。火。對。寒。山。

寒山寺

前人

流。傳。佳。句。自。唐。朝。詩。版。還。隨。劫。火。銷。只。
有。疏。鐘。添。客。恨。蕭。蕭。暮。雨。過。楓。橋。

寒山寺

蔣柴涓

曲。徑。松。花。積。雲。房。黛。色。連。一。聲。鐘。欲。午。
清。響。落。寒。泉。

寒山寺

褚逢椿

蘇州之名勝

日人取去。另鑄一劣鐘歸

還。懸於左室。唐張繼詩

云。月落烏啼霜滿天。江

楓漁火對愁眠。姑蘇城外

寒山寺。夜半鐘聲到客船

。膾炙人口。與寺相得益

彰。

(一) 瑞光寺

在盤門內。吳赤烏四年。

僧性康來自康居國。孫權

建寺居之。名普濟禪院。

十年。權建舍利塔十三級於寺中。以報母恩。唐宗甯四年。奉敕



寒山寺

近市人家水繞城。無端蹤跡作江行。黑雲壓屋有雪意。黃葉打窗如雨聲。古佛已荒空。去劫寒鐘未起。待殘更欲尋。張繼停舟處。一片蒼山暮色橫。

寒山寺 王庭

為憶鐘聲尋古寺。得因遺象識寒山。楓江橋畔人如織。始信禪房盡日間。

寒山寺 前人

西風吹夢到林邱。薄醉吟寒信。夜遊深巷犬聲人寂寂。一溪明月宿漁舟。

寒山寺 徐汝暉

一灣流水小橋東。盡日幽棲古寺中。自

修塔。塔放五色光。賜名天甯萬年寶塔。宣和間。朱勳出資重修。以塔十三級太峻。改為七級。賜額瑞光禪寺。歷代均有修葺。清聖祖、高宗南巡。立幸臨焉。咸豐十年燬。惟塔獨存。同治十一年僧西語重修。

(一) 關元寺

在盤門內。舊在城北隅報恩寺後。唐同光三年。錢鏐徙今地。明萬歷間。歷修大殿、石佛殿、天王殿、佛閣。建地藏殿、西方殿。四十六年。賜藏經。建閣供奉。疊甍為之。寸木不用。因名無梁殿。高宗南巡。嘗幸臨其地。咸豐十年燬。惟無梁殿無恙。同治十二年。僧量寬重修。

(二) 雙塔寺

在城東南隅定慧寺巷。唐咸通間建。初名般若寺。宋雍熙中王文

有傳燈明。實際不須倚杖。說虛空。杯浮竹葉。搖寒月。笛弄梅花。落晚風。雨載與君。酬唱近。睽離能不憶友公。

●章賦顯靈記 (岑竹)

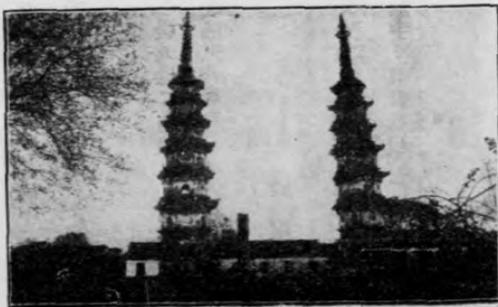
吳邑西美巷。自造寺爲前蘇貫澈所建。蘇亦宦海中人。晚年因澹于仕途。委傾其餘資。鳩工庇材。以建之。蘇則晨鐘暮鼓。清磬紅魚。作終老之計矣。迨歿。卽由本醒和尚入持。住詎本醒六根未淨。難離塵緣。日事邪行。不數年來。寺產被其揮霍殆盡。去春間。甚以寺側之章賦。質易番佛百尊于黃少臣。居士處。期約六

蘇州之名勝

罕建。兩磚塔對峙。遂以雙塔名之。咸豐十年燬。惟雙塔及一殿尙存。同治間。僧却凡稍加修葺。

(一)白雲寺

在縣西二十五里天平山。舊亦稱天平寺。山半有白雲泉。唐寶曆二年建。宋范仲淹以先墓所在。奏爲功德寺。元末燬。明洪武初重建。內有寤言堂、桃花澗、宛轉橋、聽鶯閣。皆裔孫允臨所構。清道高宗六次臨幸。



雙塔寺

蘇州之名勝

三十

月。當時有張紳一廖爲見立事逾數月。本醒。因虧累甚鉅。債台高築。無法彌補。遂僞遺絕命書。亡命海上。去冬黃以本醒已出。屈指贖期已越。兩月斯時。有滬上某賞古家。過其寓。睹此銅佛。摩挲不忍。釋手。願出鉅金購之。去黃夙崇佛意殊猶豫。然終不欲以厄加佛。拒之。是日午夜黃照例起誦經。睡間見佛止前。謂渠曰。今寺已持住。有人汝祈速往接洽。吾將去矣。言已而逝。黃一覺醒來。深訝之。詰朝卽往探訪。該寺固已有名。慧求和尙者。方由各大叢林推爲持住。

(一) 觀音寺

在支硎山東麓。晉支遁隱此。梁天監中建。會昌中廢。刺史盧簡求重修。清高宗南巡。六次臨幸。

(二) 穹窿山

在穹窿山。相傳朱買臣故宅。梁天監二年建。初名福臻禪院。明洪武初爲叢林寺。永樂中敕改顯忠寺。尋燬。宣德初重建。清高宗南巡。遙望寄題。

(三) 治平寺

在縣西南十二里上方山下。臨石湖。梁天監二年建。寺有吳王時井。名越公井。井欄有隋人刻字。明嘉靖初建石湖草堂。

(辛) 觀

(一) 玄妙觀

大證法爲王徽伯先生黃素識之因走謁告其顛末願以佛速歸但期璧還母金讓子息作香火資王聞章馭顯靈語黃欲去等言亦爲之咋舌不止蓋王亦不知尙有押佛之事也越日王卽預備儀仗樂聲鏘鏘親自迎歸該寺云

（錄丁卯三月五日蘇州明報）

蘇州之名勝

在城中心。晉咸豐間建。號真慶道院。唐開元二年。改爲開元宮。乾符元年。建文昌張仙二殿。宋祥符中。更名天慶觀。皇祐間建山門。建炎兵燹。紹興十六年重建。建熙三年。郡守陳峴建三清殿。六年。殿火。提刑趙伯疇重建。元至元元年。始改今名。至正末。兵燹。明洪武間重建。又建彌羅寶閣。萬歷三十年開圮。清順治間三清殿圮。康



玄 妙 觀

蘇州之名勝

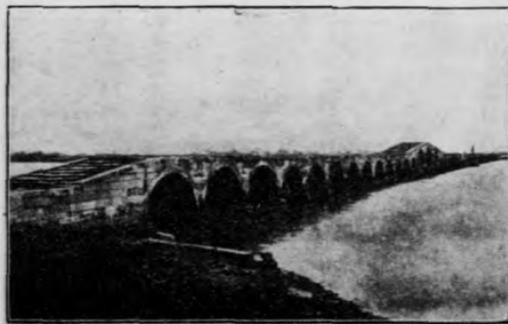
●錄蘇州商報自造寺紀事一則
西米巷自造寺為蘇觀敵以三千六百
元購置改造呈准吳縣立案給示為永
遠寺產蘇死後有本醒和尚入寺竊倨
負債纍纍將該寺財產典質殆盡不
得已遂以自殺欺人一走了事本醒去
後該寺某某兩兵入寺佔據事為中華
佛化教育社蘇州辦事處長王薇伯先
生所知以某某既非僧人未便任其久
居遂函請北寺昭三方丈推舉慧求住
持云

熙初。道士施道淵並修之。雷尊殿、天王殿、東獄殿、又先後告
成。民國元年。彌羅寶閣
燬。

(五) 橋

(一) 寶帶橋

橋跨大運河與澹臺湖上。
長千二百二十五尺。環洞
五十三。而高其中之三以
通巨艦。河為東南要道。
風濤衝激。不利舟楫。因
建此橋。唐御史王仲舒
所東寶帶以助工費。故有
是名。歷元迄清。重建數
次。今為同治十一年工程
局所修復者。



寶帶橋

附錄

余二十三年風雨飄零的苦心談

序一

吾友王君薇伯。奇士也。生有俠骨。多智計。思慮藻發。才華橫溢。顧嫉惡太嚴。喜繩人過。以是所如輒阻。窮不能自聊其生。要雖窮而其操彌堅。非義事纖毫不肯爲。非義財纖毫不肯取。於當代人物。輒橫目睥睨之。少所許可。獨以余誠信不欺。爲心折焉。以兄禮視余。故余知薇伯亦最深。薇伯少時。留學日本。得儷木田夫人。夫人賢而知書。一昨薇伯函來。以夫人近著「二十三年風雨飄零的苦心談」稿本見示。受而讀之。夫人二十三年的苦心談。亦卽薇伯二十三年的遑遑史也。薇伯從事革命最早。與孫黃齊輩行。奔走國事。厥功甚偉。而往往叢謗集尤。至今猶抑塞潦倒。不克自振。夫人不平之鳴。理固宜然矣。至夫人患難相從。備嘗辛苦。拔釵奉親。牽蘿補屋。無

纖芥之怨言。在中國今日道德墮落之秋。亦鮮此賢婦人。不圖於異國得之。非所謂十步之內。必有芳草者耶。余窮與薇伯同。而無此安貧樂道之賢內助。薇伯視余。亦足以自豪矣。特序數語以歸之。

中華民國十六年八月杭縣王博謙序

寒拾問答

昔日寒山問拾得曰。世間謗我。欺我。辱我。笑我。輕我。賤我。惡我。騙我。我如何處治乎。拾得云。只要忍他。讓 him。由他。避他。耐他。敬他。不要理他。再待幾年。你且看他。

(月芝錄陸文節公集)

序二

吾友王薇伯君。真是天生的怪傑。他的曾祖·祖·父·諸位老輩都是亡清官吏。他的叔父王式通先生。更是崇拜帝制到百二十分的程度。不但於滿清時代。中了什麼舉人進士。並且革命以後。還是拚了一條老命。贊助袁逆世凱。在北京城裏。大唱其皇帝夢一齣好戲。當時京津滬漢大小報紙。都登載他老先生在袁皇帝前。叩頭稱臣的一副景象。離奇古怪。何等熱鬧。這猶不足稱怪。到了今日。他的大公子王蔭泰。又欣欣然做起什麼大元帥府的外交總長。洋洋自得。你想這種不可思議的萬惡家庭。吾友薇伯。突然產出。當然他的祖母。他的叔父。必要用盡心血。制他死命。這也是天然的道理。我木田大嫂。何必哀哀嗚咽呢。

薇伯留東京。繼迎木田夫人。（薇伯元配朱氏·浙江紹興鄉間一村女·其祖母強迫成婚，

未六月薇伯卽出走日本，蒞日後會託浙江女俠秋瑾。兩次赴紹，勸其往日本學習女工。朱氏誓死不出國門。並語秋瑾女史曰：薇伯要我讀書。我不以薇伯爲夫。秋瑾聞之大憤。歸東後語薇伯。薇伯遂娶木田夫人。嗣後薇伯回國後。與朱氏脫離關係。分拆而居。給朱氏特別費用四千元。至今每年底猶補助費用二百金。蔭泰在柏林。得一德國女子。（蔭泰赴德留學。道出申江，招其未婚妻陳玉貞到滬。同寓一品香。戀愛逾恆。蔭泰至德。未及兩載。卽與德女子訂白頭約。致函玉貞。聲明離婚。玉貞得信後。卽舉槍自擊。彈中入臂。幸玉兄力勸。始獲不死。）木田大嫂全力成。薇伯以唱革命。德女子全力助蔭泰以開倒車。吾不料日本帝國中有賢夫人。而轟轟烈烈名震全球推翻帝制的德國民族。乃有此妙女子。豈造物變化。顛倒衆生。不如是不足以發揚薇伯的奇才麼。

余讀木田大嫂近著「二十二年風雨飄零的苦心談」有感而書此。

中華民國十六年九月浙江費汝升識于上海寶成銀樓經理室

影 攝 念 紀 史 女 芝 月 王

二十三年前未嫁薇伯時小影



已嫁薇伯後小影

蘇州日本領事館頒給之表彰狀

表彰狀

木田月子

右者大正元年以來當地ニ在
住シ一意専心家業ニ精勵シ
而モ永年ノ間波瀾曲折克ク
幾多ノ困難ニ堪ヘ陰ニ陽ニ
日支親善ニ盡クシタリ其效
績尠カラス依リテ銀盃壹個
ヲ贈呈シ特ニ表彰ス
昭和二年二月十一日
在蘇州
領事從六位勳六等岩崎榮藏

王老生藁君之公手蹟



對前室遺像有感而作

相。莊。鴻。案。夙。稱。賢。回。首。音。容。十。載。而。太。

息。庭。中。一。杯。酒。可。能。消。滴。到。黃。泉。

生。前。遺。語。尚。堪。思。孀。母。何。如。繼。母。二。惡。令。

日。告。卿。儻。慰。成。行。兒。女。賴。扶。持。

今日其兒女付孀母不為付繼母之為愈也嗚呼
一生痛恨蓋可知已

對前室遺像有感而作

相。莊。鴻。案。夙。稱。賢。回。首。

音。容。十。載。而。太。息。座。中。

一。杯。酒。可。能。消。滴。到。黃。

泉。

生。前。遺。語。尚。堪。思。孀。母。

何。如。繼。母。慈。今。日。告。卿。

儻。慰。成。行。兒。女。賴。扶。

持。

秀亭嘗語余曰與其

兒女付孀母不如付

繼母之為愈也嗚呼

一生痛恨蓋可知已

(月按)所謂孀母者即後

叔王式通之夫人也

薇伯留學日本時叔姪兄弟三人之合影

薇伯二十五年前之小影



中坐者爲王式通右側立者薇伯左側立者蔭泰時薇伯留學日本大學蔭泰留學東京第一高等學校薇伯住東京下谷上根岸町蔭泰住東京本鄉町相距咫尺式通抵京已四日薇伯猶未得信嗣有友人談知式通已偕北京學部所派之視學員來京消息

薇伯遂奔至蔭泰寓
叔姪始相晤即在本
鄉町之某照相館攝
影留作紀念

松江名士楊了公致薇伯書

薇伯先生大鑒前在日新旅社一談契合之程度又增數倍矣今試問春申江上能不入嫖賭之界者曾有幾人了公方哀此世界而先生與有同心焉幸何如之樓外樓鈔筒安

松江伯先生大鑒前在日新旅社一談契合之程度又增數倍矣今試問春申江上能不入嫖賭之界者曾有幾人了公方哀此世界而先生與有同心焉幸何如之樓外樓鈔筒安

放乞與黃楚九先生商定示知實行至感東京報名法政乞書函送去為荷奉上拙作木刻二紙一送楚公囑政此上公安

小弟了公合十

薇伯先生大鑒讀先生與任君書想見倚裝之時困苦極矣弟為新劇團解散不禁為孤

松江伯先生大鑒讀先生與任君書想見倚裝之時困苦極矣弟為新劇團解散不禁為孤兒放聲一哭既而思之有先生在必能為孤兒設法也弟每到海上欲求一誠實熱心之君子與之共事殊不可得今得先生之誠懇及規劃不禁玉體投地而適逮團員之風潮立時解散此非先生之過團員交口而證之了公獨誠信而悅之蓋了公之於先生雖屬初交定有三生之契亦不自知其所以然矣見

字乞賜福音為盼此上公安

弟了公合十

月芝蘇州經營製繩事業之狀況

月芝在蘇州設立製繩工廠並招各縣商人承辦分廠每廠發給繩機十台打草機一台每日可製頭等草繩十五担每一分廠除開銷淨盈月可得二

蘇州製繩廠大門



製繩工廠之一部



百元上下其利甚厚故大江南北一時來蘇請設分廠者竟達四五十處之多嗣以時局影響戰禍不絕蘇州交通殊感不便故特移廠上海委任費君經理

蘇州警察廳保護告示

江蘇蘇州警察廳 為
 蘇州製繩廠自設立以來，業已發展，現因時局影響，交通不便，特將該廠遷移至上海。凡我市民，如有發現該廠遷移後之各項設施，請即向本廳報告，以便派員前往保護。此示。
 中華民國二十五年十二月十五日
 蘇州警察廳 啟

况狀之報蘇辦創州蘇伯薇



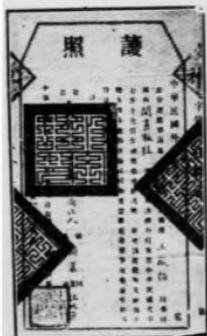
未封之蘇報社



已封之蘇報社



薇伯通緝取消後回國時神戶中華
駐日領事館之護照



况狀之局書圖今古辦創本日在代時清前伯薇

營業部設立日本東京神田區南神保町七番地



編輯部設立東京神田區小川町三十七番地
該局爲日本留學界發行代售革命書報之機關

緣起曰書寮之設亦已夥矣而流販者徒按冊而計值善買者亦祇承風而牟利求能確有宗旨應世所求鑑別驪黃默持風會者則市中屠狗渺乎未之前聞同人等自忘其爲不肖邇者有古今圖書

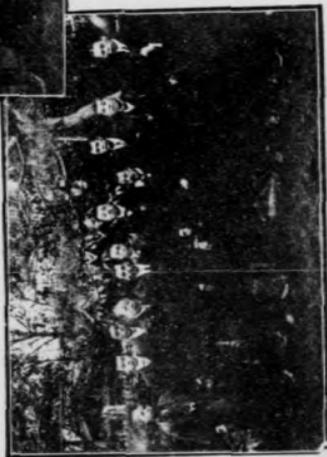
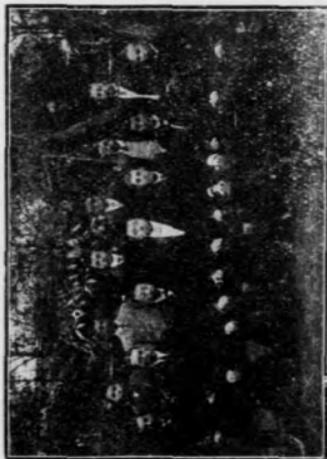


書局之設其義竊有所附今更發行所謂(圖書世界)者與當世賢豪間之以文字自見者略有評隲與世同好月出一冊相輔以行世之君子以覽觀焉亦作者之林也

況狀之社報新華日辦創本日代時清前伯微

部輯編社報新華日

報新華日

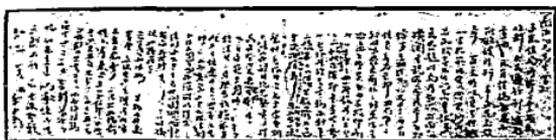


部業營社報新華日

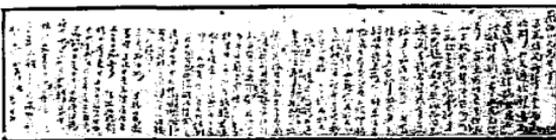
報係三日刊為東京留
日學生界唯一之宣傳
機關每次流行數千份
勢力甚大總編輯為廣
東夏重民社長由微伯
自任社設神戶市元町
三丁目編輯局設東京
青山高樹町

湖南章士釗奔走革命時致薇伯書

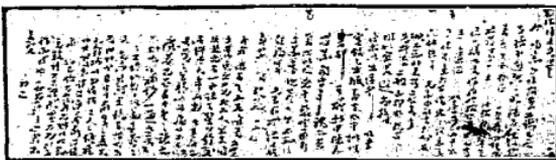
(一 其)



(二 其)

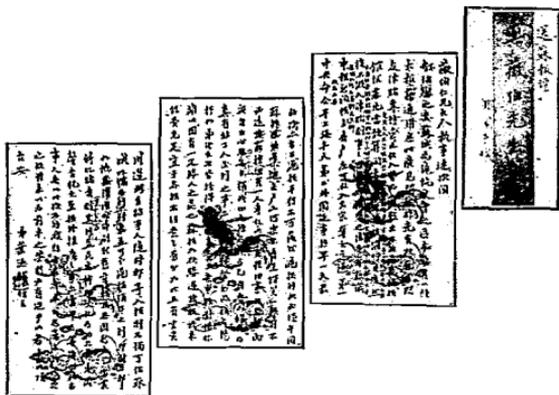


(三 其)



行嚴在滬發行國民日日新聞
委託薇伯爲駐蘇通信記者此
爲薇伯與行嚴締交之始時薇
伯在蘇組織吳中公學社彼此
往來甚密誠如函中所謂無事
不可商量者其後行嚴爲北京
注意出走日本寓小石川區薇
伯因事赴東吳弱男出典質券
相示薇伯急以所攜四百旅費
中取二百金贈之其交誼不可
謂不厚矣

書伯薇致輝德葉士名南湖



葉君 居蘇 時與 薇伯 往來 甚密 此函 與薇 伯論 辦報 之法 頗以 蘇報 組織 有精 采推 爲吳 中報 界之 特色

上海國語日報社推舉伯爲東亞新聞大會代表函

威伯先生閣下茲委託閣下爲本社代表前赴東亞新聞大會除函致該會外理合專函委託敬祈大駕屆時前往與會可也此請 台照 上海國語日報社謹啓(十年三月十八日)

上海國語日報社謹啓
威伯先生閣下亦委託閣下爲本社代表前赴東亞新聞大會除函致該會外理合專函委託敬祈大駕屆時前往與會可也此請 台照 上海國語日報社謹啓(十年三月十八日)

日本一報社社林會理王君
王威伯先生 閣下
上海國語日報社

余二十三年風雨飄零的苦心談

王月芝(原名木田月子)

余在日本小學時代。嘗聞人云。中國有千里姻緣之語。吾嘗莫明其妙。其後嫁入王氏。由日本而中國。不得不謂非千里之姻緣矣。光陰迅速。日月如逝。我嫁徵伯夫君。忽忽已經二十三年。困苦艱難。歷盡磨折。大正元年偕徵伯回國。頃者昭和登極。駐蘇日領事岩崎榮藏。欣逢紀元令節。特在領事舉行表彰儀式。我亦表彰中之一人。得贈銀盃一只。表彰狀一紙。隆儀下頒。受之有愧。今舉我二十三年的苦心談。作一紀念談。想亦諸君所樂聞。

我是日本東京士族。父早棄世。隨母歸甯。自幼稚園以至女學校讀書。皆在外祖母家由我母一手提拔。辛苦成全。十九歲女校卒業。本欲隨同我母。上京生活。獨立經商。其時徵伯夫君。由友人介紹在大阪私立青雲中學校。研究日語。寄宿於曾任大阪高等工業學校助教今井鈇之助家。同寓中有一中國留學生江聰。江蘇吳縣人。爲三吳名流江建霞之胞姪。亦在大阪高等工業學校應用化學科讀書。江友岸田太郎氏。大阪朝日新聞社的漢文記者。時余兄木田小醉。亦在東京讀賣新聞社充任圖畫記者。與岸田氏相善。而與江聰亦稱莫逆。今井鈇之助氏之寓。距吾家僅一隣。徵伯短小精練。和藹可親。余

兄見而愛之。歸語吾母曰。隣家有一中國留學生。將來必成大器。我母額之。一日。岸田氏來訪我母。盛稱薇伯品學俱優。願爲作笈。我母笑應之曰。我女年已及笄。原欲擇人而字。了我心願。惜郎君國籍不同耳。岸田曰。中日兄弟之邦。同文同種。四海之內。皆兄弟也。何拘拘於國籍問題爲。我母曰善。姑待我兒歸。再報命。時余兄出入京阪。月歸一二次。某夕由東京來。我母當以岸田所語語之。余兄喜形於色。翌晨卽訪岸田。介紹與薇伯相見。歷詢薇伯家世。始知薇伯爲一有志之士。其曾祖宗濂公。曾任江蘇八縣知縣。(上海、南匯、武進、無錫、丹徒、吳縣、長洲、元和)其祖璋公。曾任草鹽場大使。其父敬銘公。曾任海州直隸州州吏目三年。保捐知縣。任奔牛釐捐局總辦者又三年。捐升在任候補道。其叔式通。亦以名進士在京刑部主事。詩書之家。必有後昆。薇伯以在蘇州排滿事業失敗。匿居滬上。始與章士釗。辦理國民日日新聞。盛倡倒滿。天下風靡。時蘇州位育堂義塾。亦以響應各省散學風潮。有塾生藍公武(曾任國會議員)王拱之(現任北京電話總局長)二人。憤教育不良。率衆散學。求援於薇伯之門。薇伯乃爲奔走號呼。組織吳中公學社於觀前之廣仁里。自任社長。包天笑爲國文教員。吳和士爲博物教員(現任省視學博物學會會長)蘇子毅爲英文教員(後剃度爲僧改字曼

殊詩學名家)徐半梅爲體育教員(現爲新劇大家)吳癩庵爲歷史教員。(曾任北京大學詞典教員)吳縮章爲物理教員。(曾任省立農校物理教習)規模粗具。成績斐然。惟校中課本。以黃帝魂爲國文讀本。中國歷史爲史學讀本。薇伯又創吳郡白話報旬刊。由癩庵以揚州十日記編製京劇。昌言革命。公然無忌。時張一鵬亦設新書店於醋坊橋。曾售該報。未及半載。卽爲當時巡撫恩壽所知。而諱長洲縣李紫璈。拘捕書社會計蔣某。封鎖公學。大搜黨人。雷厲風行。幸社員消息甚速。相率而逃。無一累及者。薇伯亦避難於天賜莊博習醫院。次晨乘輪至申。寓上海新聞路之東大陸印書局。爲章士釗所設。薇伯抵局後。適湖南黃興原名克強。亦由湖南來。披襟而談。相見恨晚。克強時欲赴湘舉義。密商薇伯。欲以糧台一席相託。薇伯志在東渡。婉詞拒之。適其友王紹曾(回國後曾任崇明縣知事。)亦以自資赴日留學。遂與偕行。去滬未旬日。而東大陸印書局代印湖南陳天華所著之警世鐘。爲英捕房所得。指爲破壞租界治安。拘捕章士釗、黃克強、柳聘儂、彭毅、等。下諸西牢。薇伯幸免。此薇伯到東游學之一段歷史也。余兄聞之。深敬其人。遂與我母商決。以余許之。明治三十八年十一月乃由江聰、岸田太郎兩人作證。結婚於大阪公園之帝國飯店。結婚後。薇伯以青雲中學。研究日語已有進步。欲投

考岩倉鐵道學校。率余上京。賃居於上野公園山下之下谷上根岸町。惟東京官立日校定例。凡留日中華學生。非由駐日本國公使正式保送。不能入校。岩倉雖非官立。而與鐵道省有密切之關係。竟亦嚴格相持。幸斯時江蘇巡撫恩壽他調。已易端方。轉轍設法。乞得蘇撫咨送駐日公使之一咨文。始向楊使正式請求。保送入校。惟薇伯留學。一身之外無長物。到東時。初由薇母許氏給以川資八十金。菴阪半載。又得薇父匯金百元。苦心維持。艱難萬狀。至斯時已告匱乏。余已以終身相託。不得不自任學費之籌劃。遂赴阪迎母。同居東京。我母女二人。從事針線。朝以繼夕。以所得之工資。作夫君之學費。支持兩年。慘淡備嘗。山西留學生監督吳春康。知薇伯刻苦自勵。並悉乃弟孟羣蔭泰。由叔父式通。送東留學。肄業東京第一高等學校。年得祖母匯金四五百元。同一兒孫。待遇有差。心爲不平。稟請山西張撫。補給本省官費。岩倉鐵道專門學校課目分業務。機械兩科。各定三年畢業。薇伯研究業務。卒業後復入日本大學商科。又三年。得有大學文憑商業學士名譽學位。自亡清末年。偕余返國。時余已生二子一女。留日計十有一年。爲山西留日學生之最先者。惟此十一年間。薇伯讀書之餘。熱心革命之運動。連絡同志之奔走。有足紀述者甚夥。茲余以可供諸君談資者略言之。一曰刊行排

滿之書報也。橫濱有日刊華僑公報。(主筆浙江密鐵錚)神戶有五日刊日華新報。(主筆廣東夏重民)東京復出雜誌一種(實業之支那)月刊一冊二百餘頁。皆余與薇伯。苦心經營。宣傳革命。聲勢浩大。當時華僑之心理中。類多爲康有爲梁啓超輩之保皇思想所惑。薇伯大倡倒滿。全體震動。其後協同黃克強、宋教仁、田桐諸君。發起民報於東京。又集合山西景耀月(曾任教育部次長)王用賓(曾任山西省議會議長國會議員)邵修文(現任京師地方審判廳長)諸君合組古今圖書局於東京神田。自任局長。編譯新書。並作代理發行革命書報之流通機關。其勢力之雄厚。凡亡清時代。留東諸同志。殆多能言之。一曰奔走國際之運動也。日本桂太郎內閣總理。爲謀國際之圓滿。欲利用在留日本之各國新聞記者。宣傳作用。以利邦交。特令東京著名日刊之報知新聞社長箕浦。(後任遞信省大臣)與政府關係之國民新聞社長德富。糾合日本報界名人。組織國際新聞協會於首都。桂太郎與日本外相後藤新平。自任名學會長。其時各國駐京記者都二十餘人。一律被聘。獨我國缺如。以會章規定。非由日本會員二人以上之介紹。不得聘任。時我國報界向無特派駐京記者。即有一二留學生之擔任通信者。性質秘密。無由知之。亦不與日本報界通往來。薇伯聞而恥之。特獨力組織日刊通信。定名日華交通社。如上海

新聞報、申報、天鐸報、神州日報、中外日報、民立日報、北京日報、以及各省之重要新聞社。日寄通信。大受歡迎。實爲中國創辦通信社之元始。該社成立。余即奔走於日本各大新聞社間。採訪紀事。協同相助。乃得報知新聞社之箕浦。及日本電報通信社之清水。介紹徽伯於國際新聞協會爲會員。日本政府與全國報界。始知中國亦有新聞記者在京。對於僑民之取締。留學生之運動。不復橫加壓制。而知稍有所顧忌。自是以後。日本政府例年開催之御苑觀櫻會。外務省舉行之天長節內閣祝賀夜會。（日本定例此種宴會、文武官員非三品以上大員、不得列席、國會議員、及國際新聞協會會員、特別許可加入）及伊藤博文公之國葬大典。徽伯均得列席。（其席次在各國大公使席之次位）其最有趣味者。莫如武昌革命。袁世凱出兵反抗。德軍暗助袁兵。加害我革命軍。徽伯以國際新聞協會會員資格。致書於駐東京之德國大使。請其電致該國政府。加以致意。書去次日。大使親來訪問。立電本國。日本報紙。全國宣傳。雖其後未知該電之成效如何。無從證明。即此一端。足徵國際新聞協會會員之地位重要也。一曰。救濟留學生之窮困也。亡清時代。留學生奔走革命。開會捐資。犧牲既大。生活日艱。東京神田有中國藥房主廣東林某。利此機會。作高利貸。（高利貸者、日語也、中國之所謂引子

饒也、留學生官費每月三十三元、由公使館留學生監督處、發給官費摺一口、按月由本人領取、而林某貸金三十元、以摺作抵、每月取息三元、（時留學生人人心中、祇知有國、不知有家、滿腹熱血、唯知排滿。明知林某之高利。而亦不屑曲意相就。余聞其事。爲之大駭。急商余母妹今井氏。乞貸數千金。經營此事。預借官費一月。僅取利息五角。廣發傳單。登報通告。林某大受打擊。四出中傷。謂徽伯爲日人放債。有心賣國。當時上海神州日報。竟登王蔭藩爲賣國奴。廣東夏重民（曾任廣東鐵路局長、）時爲留日學生會館總幹事長。閱報大憤。去函力辯。上海中外日報所以有留學界偉人王蔭藩小傳之刊。爲章乙佩作。革命事起。官費停止。各省學生。待哺嗷嗷。有畫家張伯英者。絕食數日。奄奄待斃。徽伯不忍坐視。出而組織中華南畫會於東京青山之高樹町。特聘居留神戶之中國畫家葉伯常爲會長。以張伯英副之。售畫餘潤。救濟學生。購送船票。或補助旅費。徽伯主持畫會。余任出售之責。奔走各處。舌蔽唇焦。幸蒙各方同情。售資萬金。余自問對我夫君。對我學生。可告無罪於天下。而不料余以一場之熱淚。其所得結果。竟使我夫得賣國奴三字不潔之名。至今思之。猶有餘痛。中國人士之心理。余誠不可思議也。民國元年十月中旬。宋教仁來函相招。徽伯偕余輩離東。先至

上海。本欲隨同宋氏。(宋與徽伯。本通譜弟兄。)赴京組閣。不幸天亡元勳。宋氏在滬。一擊而死。徽伯遂亦灰心政治。願以言論喚醒國民。投身上海民強報社。與王博謙君經營館政。約一年有餘。嗣又獨資創辦上海商報者四年。適袁氏稱帝。舉世滔滔。書衡二叔竟繼張一磨而任袁氏之機要局長。叩頭稱臣。贊襄帝制。(時張一磨因憤辭職。叔竟不顧清議。毅然到任。)致北京至今猶張一磨之頭。王式通之脚的市謠。當時徽伯致書二叔曰。

叔父大人尊鑒。山遙水隔。南北睽違。燕去鴻來。光陰如駛。臨軒懷想。無任依依。茲者風塵傾洞。國勢飄搖。一髮千鈞。危機四迫。在野名流。既曲順輿情。力扶民意。明達之士。亦潔身引退。甘隱林泉。至論愛國英豪。則控弦躍馬。奮袂而與。固抱有百折不回志願。且非喋血河洛。直搗燕京。直不足快國難於萬一。慨自唐蔡倡義於昆明。曾幾何時。而戴陸亦追蹤乎黔桂。以爲弔民伐罪。揮戈北上之舉。今則嶺海怒濤。旣掀天兮揭地。錢塘洶浪。更逐電而馳風。是實可爲一般執政者寒心。况川湘敗耗頻聞。秦魯警報迭至。大勢已去。莫可挽回。雖欲責成一二人以調和。其可得哉。是以縱觀今日現象。苟非項城實行退位。直不足雪天下人之公憤。夫項城於我叔

。固素相契合。其寵叔以高位。授叔以厚祿。所以優禮於叔者。亦可謂至矣。然倘放下良心。一思其過。度叔亦無不心痛而毗裂。則其謀害宋氏。取消國會。摧殘言論。屠戮黨人。擅借外債。斷送權利。橫征暴斂。剝削人民。欺凌舊君。禁錮名士。監視偉人。嚴防民口。違背信誓。強姦民意。濫封爵秩。大興土木。謀叛民國。圖復專制等諸罪惡。四年以來。幾擢髮難數。誠歐陽子所謂罄南山竹而不勝書。決東海波而不可洗矣。由是而言。則南軍所以必欲聲罪致討而推翻之者。固自有道。惟是叔猶不審情勢。如鴛鴦戀棧。不忍遽去。則姪有不能再安緘默。而爲叔一詳告者。何則。回溯曩年。叔東裝赴京。姪送行胥臺時。正當松菊猶存。梅花將放。郊原清景。不啻尙在目前。而臨別之際。叔猶握手促我同往。謂二弟蔭泰。今已參議法制。碌碌無能之李慶芳。月薪亦有千金之巨。汝能改變素志。則非運動得一局長美差。卽代謀一參政優缺。報界生活。終非長策。殷殷相勸。則姪彼時倘此血一冷。隨上長安。欲取富若貴。固易如反掌。且及今亦不致捲土重來。再爲馮婦。以辦此一份商報矣。實未知姪前於民強之所以半途辭出。亦因社中諸子。一旦有換其宗旨故耳。况天良未泯。安敢屈從。是以緩言却叔。尙叩叔以項城果否有皇帝野心。

叔力辯其無。惟第二任總統。或仍屬項城。以其雄於兵力。至第三任總統。則恐爲宋卿云云。是則邇數月間之行動。其將何解。此非姪之有所吹求。以責備於叔。蓋姪於數年前。已燭照其奸。致負叔一片提攜之誠意。然此心固無日不耿耿也。故自去年接辦商報以來。社友有痛貶政治之不良。項城之過失者。必令稍帶和平。非有懼夫當道之力加干涉。亦以叔姪之感情有傷耳。而不謂東西洋報紙不察。如泰晤士報。尙指姪報爲半官報。日本大版朝日新聞。則殊爲荒謬。竟以姪報爲完全之帝制報。豈非可異之事。且姪倘希項城補助。則昔時叔非欲令姪來京。辦一有津貼之政府報。而爲姪所拒絕乎。乃此種談論。甚有出諸僑交之口。雖推誠相告。亦不我喻。此無他。以姪報之態度。過覺和平所致也。雖然。叔與項城有知遇情。自不能一旦脫離牢籠。惟曷不勸其退位。旣以解兵戈之擾攘。又可減輕國民痛苦。項城亦不致平地無側足之所。而叔之宏舉。微特南方諸友。深爲感激。卽推而至於薄海同胞。當亦莫不有所欽佩於叔之熱忱孤詣也已。若不然也。則嚴光釣隱。范蠡舟游。豈不可步武之耶。姑蘇舊宅。草堰鹹田。依然存在。姪願與叔共爲養老計也。且老子不云乎。人貴知足。今叔而不速謀退步。則恐全國一致獨立以後。雖欲逃禍。其能

免耶。是閨門生死。悉繫於我叔一身也。誼關骨肉。故敢直陳。至於聽否。懸命以待。不勝惶懼之至。此請

福安

姪蔭藩鞠躬

奈二叔熱中帝政。閱書大憤。從此徽伯去藁。付諸一焚。徽伯知非感情所可激動。遂於商報。排斥帝制。驚醒輿論。日以愛國文字。與世相見。至袁氏登位。徽伯挈家避難。汲隱於鄉。余亦以回國未久。語學未精。雖欲內助。力與心遠。屢讀徽父詩稿。有對前室遺像有感而作七絕二首云。(一)相莊鴻案夙稱賢。回首音容十載前。太息座中一杯酒。可能清滴到黃泉。(二)生前遺語尙堪思。媿母何如繼母慈。今日告卿卿愼慰。成行兒女賴扶持。又註曰。秀亭嘗語余曰。與其兒女付媿母。不如付繼母之爲愈也。嗚呼。一生痛恨。蓋可知已云云。按秀亭卽徽伯本生母之別字也。余於夜半靜坐之時。淚潑溼下。乃仰體慈意。盡我孝思。奉侍回蘇。獨立經營製繩事業者數年。其間徽伯旅客北京。奔走東西。命運不良。無善可述。糾合北京報界名人光雲錦、烏澤聲、徐瑾、汪立元、康士鐸、谷耀山、婁鴻聲、王河屏、張傳繪、吳光熙、陳溥賢、張友棟、湯用彬、彭希民、馬璞、王博謙、李安陸、諸君。

余二十三年風雨飄零的苦心談

十一

組織北京報界日本視察團。到東游歷。備受歡迎。當公推任爲北京報界駐日代表。留東一年。接到蘇州薇母急病之電。星夜歸國。己未正月二十日到蘇。時薇母口舌已強。欲言不能。兩目瞪視。淚盈兩眶。余侍母病月餘。焚香祝禱。卒不能起。西行不返。痛矣何言。薇伯與余亦唯有嗚咽而已。其後南北爭戰。國民黨員田桐與光雲錦接洽。特開和會於上海。北方和議總代表王揖唐將軍。奉命赴滬。上海報界。力持反對。輿論龐雜。莫可究詰。徐樹錚馳書薇伯。並電匯六千元。命創蘇報。提倡和議。融緩南北。薇伯遂以三千金購辦印機。延聘職員。布置報社。出版匝月。申蘇報界爲之一震。和議論調。亦爲轉移。對於王揖唐之來滬。不如前之積極攻擊矣。（湖南葉德輝君致湘陰左蘭生書曰。王薇伯兄。多年相識。抱懷頗異於人。報館在蘇。正所以別於上海一派也。）王遂安然抵申。復由光雲錦介紹。聘薇伯爲上海北方和議總代表處祕書。月薪四百金。復由徐樹錚月貼二百金。時蘇報開支巨大。薇伯以所得之資。全數津貼。猶嫌不足。四出張羅。竭澤而漁。幸得支持經年。奉直戰起。段氏下台。上海和會同時解散。蘇報以痛擊直系首領吳佩孚。不遺餘力。卒被南京李純。密令蘇常鎮守使朱熙。封閉拿辦。適薇伯黎明因事赴滬。一若冥冥中有神護衛。得免於難。社員被捕。印機收沒。軍警

達布。如獲大盜。時余居該社之後進。回憶當時圍捕之森嚴。其一種令人可怖狀態。不寒而慄。歷歷猶在目前。軍警既沒收該社財產四千餘金。復欲侵入內室。幸駐蘇日領事松宇浩氏。聞信而至。詳為說明。方得軍警之諒解。凡余私人財產。概未株連。否則不分皂白。幾為一網打盡。前進房屋以報館所租。當然釘封。不許出入。後進為余住宅。罪不及妻孥。故一應家具。准余保留。惟由蘇州警察廳日夜派警二人。輪流監視。不得與外人通往來。困守籠城。兩月有餘。婢僕相率而歸。親戚不敢探謁。余心甚鎮定。處之泰然。惟日夜祝我夫君之平安已耳。蘇報記者朱梁任。被送入陸軍監獄。特處徒刑六個月。徽伯由李純懸賞萬金。下令通緝。余囑三妹。赴獄探視。月必一二次。蘇州報界。懦弱無聲氣。向不為社會所重視。此獄發現。全國震驚。足為三吳報界之彩色。徽伯出亡日本。未及半載。李純暴病而卒。繼其任者為齊燮元。時大阪華商總會兼大阪書報社長朱蕓青。會同橫濱華商總會神戶華商總會長崎華商總會及三江公所公呈駐日公使。電致政府轉咨齊督。取消通緝。徽伯始得無罪而歸。然已去國十有餘月。余經此重大之刺激。覺悟非有獨立營業之機關。不得生活安全。兒女已大。教育需人。不得不改變方針。專心家政。愛國問題。徒傷吾心。繼思余一弱女子。雄心未死。能力有限。

不得不擇一可能性之女子職業。爲一勞永逸之計。蘇州爲江南名勝之區。東西國人。相率來游。無一相當之介紹機關。(日本凡名山勝景地方、國家鐵路局必組織適合外人之高尚旅館。並特設精通各國語言之招待員、隨同引導、廣印各國文字名勝指南之書籍及風景明信片、藉留紀念、)實一國民外交之缺點。遂決計創辦精養軒旅館。余本日產也。吾豈敢數典忘祖。自當專謀便利日人之觀光三吳者。意志既定。走訪搏松領事。乞求援助。深蒙贊許。乃於民國十年十月二十六日由余母木田澁子呈准日領註冊。獨資設館於閩門外大馬路。發起伊始。輿論突起。羣謂王徽伯藉借外人勢力。組織黑暗機關。各公社士紳代表四十餘人邀同警察廳長李明遠及吳縣知事郭增基。大開會議。公然反對。特公舉代表四人。親謁搏松領事。要求取消。其交涉員楊士晟先生致領事公文。竟有王徽伯爲著名無賴。必將包庇煙賭。藏垢納污等語。原文具在。讀之堪嗤。幸搏松領事。深知下情。面告四代表曰。王徽伯君。出身留學。有生以來向不吃煙。不嗜酒。不賭錢。友王徽伯君者當無不知之。(松江楊了公致徽伯書曰。試問春申江上。能不入嫖賭之界者。曾有幾人。了公方哀此世界。而先生與有同心焉。)品行公正。我不敢如諸君之公然侮辱。信口雌黃。至精養軒成立以後。有無如交涉員公文中所指情形。

何妨拭目以觀其後。王君端人也。其妻必端。我以信王君者信其妻。况該軒具呈者爲木田瀧子。與王無涉。何曉曉爲。四代表知搏松領事其意已決。塔然出館。噫嘻。余夫薇伯。心地坦白。待人以誠。有何開罪於諸君。而諸君必信口誣讒。一至於此哉。本館開設至今。已臻六載。試問曾有一秒鐘之牌聲。與一線光之烟氣否乎。曾有如蘇州城廂內外各旅社野雞抖客。擾客清夢。宛若台基之行爲否乎。此敢公然自信而質問諸君者也。雖然。精養軒所謂事業者何在。六年中之招待日本觀光團者三十餘起。刊送日本文之蘇州指南者一萬餘本。（凡來蘇日人無不各贈一冊，厚約百五十頁，）發行蘇州名勝風景明信片者。七十餘種。（可來參觀，）接受日本觀光團與旅客個人之謝函者一百餘件。試問蘇州各同業有此巨大之犧牲否乎。有此高尚之眼光否乎。有此熱烈之影響否乎。成績如是。聊以自慰。惟時局影響。營業不振。年復一年。虧損萬金。（開館後，如排日風潮、江浙之戰、日本地震、孫蔣之戰，）每年受損二千餘金，）邱薇伯之驅齊問題。（請參觀王博謙先生之驅齊始末記，）奔走運動。個人耗費。猶不在中。即以驅齊一事而言。外人不容。對於薇伯。亦加非議。讀博謙始末記。當可恍然相諒。今特以王博謙君所著始末記錄之。

謹路者竊於上年東南戰罷。齊氏返甯。念元惡之未除。悵請纆之無路。遂從事於倒齊運動。密友王君徽伯。向居蘇州。與軍隊極多聯絡。因一面商明光君雲錦。一面密遣徽伯運動軍隊。先與第二師副官長王君念祖接洽。嗣以該副官長實力不充。未收效果。而中央免齊之令已下。其部下第二師長吳恆瓚。宣言將廢燭蘇錫地方以洩憤。博謙等恐蘇錫兩地人民遭劫。進行益急。遂與蘇州工兵營長李君國屏。聯結運動駐蘇五六兩團。及警察商團全體。一致反齊。由該兩團公推秦洸爲蘇州臨時總指揮。於十二月二十四日通電。表示脫離齊氏。服從中央。此電到甯。齊氏大驚。吳恆瓚逃。次日齊卽下野赴滬。博謙承光君雲錦之囑。代表赴蘇。慰勞士卒。抵蘇後。秦洸與李國屏。不能相容。雙方幾至開火。經徽伯極力排解。始得無事。及博謙徽伯回滬。而秦洸受齊黨陳孝思運動。卒有與五團內訌情事。迨至齊氏重復稱兵。以大軍壓蘇。秦洸卒以被擠而出走。時徽伯在申。復分別密函李國屏尤其惠王振亞魏旭東出而維持地方。公推工兵營長尤其惠爲臨時警備司令。王振亞爲保安隊司令。魏旭東爲商團司令。聯合組織。出隊防堵。此次齊軍潰兵。常錫曾大肆搶掠。而蘇州獨免。雖地方士紳奔走之結果。亦未始非徽伯事前函李尤王魏布置之力也。

博識不敢言功。而徽伯奔走之勞。實不可沒。因撮敘大要情形。仰祈鑒察。王博謙謹略。

王博謙君。去年在江西省長公署任秘書長。徽伯年已四十有五。余亦四十二矣。人生若夢。爲歡幾何。余夫婦今後對於兒女之婚娶。家政之維持。個人之懺悔。葬地之選擇。及時綢繆。經營未遑。愛國有志。補苴乏術。前途茫茫。有泣而已。余二十三年之中心痛快者。兩事。(一)力避家產之紛爭也。中國惡習。力爭遺產。父母之黃土未乾。家庭之訟爭已起。骨肉反目。鄰里傳笑。人生之悲。莫大於此。余祖有二房。徽伯居長房之孫。祖父棄世。二房婦母亟謀分產。時徽父已故。徽伯在東。婦母坤綱獨斷。請求祖母。代寫分書。不邀親族會議。不待長孫在場。(徽伯奔喪回國。分書業經成立。逼送親戚。函請補印。)手續簡單。愉快萬分。我家祖產。計有草堰場窰產二十副。價值二萬。鐵瓶巷住宅一所。價值萬元。臨頓路市屋一所。泰亨公典存款一萬五千元。(係二房經存。自辛亥革命後。二房云歷年虧耗。僅餘股本英洋七千五百元。)天津小站樂利農業公司股票洋七千元。(按此款本係徽父海州吏目任內盈餘。由祖母匯京二房購置股票者。)及當時現款並家用紅木器具暨祖母珍飾約有二萬餘金。其分書中以草堰場窰產二十副。各得其半。臨頓路市屋爲長孫蔭藩特別分產。泰亨存款七

千五百元。亦各得其半。而以鐵瓶巷房屋給長房。以樂利公司股票給次房。至所有家用紅木器具及全部珍飾。由祖母自行保管。分書載明。（存蘇帶京、隨時酌定、自由給與、不再分析字樣、）祖喪終畢。二房迅即派人來蘇。迎養祖母赴京。當將紅木器具二百餘件。珍飾二萬餘金。隨同祖母捆載以去。實行自行給與。不再分析之手續矣。奈祖母到京。未及一年。即行棄世。時親友拘於舊習。慫恿余等。可與二房以法律相周旋。薇伯與余一笑置之。謂區區者何足爭爲。其後薇母去世。薇父奔牛釐局。盈下三萬餘金。除匯寄祖母收入公賬名下六千餘元外。尚餘二萬四千元。均由繼母。委託舅母許氏。代置田產於泰州。並購市房一所。繼母病前以時局不安。又將衣裳珍飾。裝置四箱。寄存許家。至繼母去世。家無粒食。薇伯哀告舅母。略予通融。舅母概諉不知。嚴詞拒絕。時爲薇伯鳴不平者。咸欲與許氏以難堪。薇伯曰。我母愛我逾分。母死而忽與許家爭。是不孝也。故我母喪事。約用三千餘金。皆由薇伯個人羅掘。乞貸友朋。惟時未十載。而許家已賣田棄產。一貧如洗。哀哉。（二）我房子孫能自立也。薇伯兄妹四人。長適吳氏。次適程氏。出嫁兒女。興衰不論。而與余十餘年來。影形相隨。甘苦與共者惟我三妹。我無三妹。誰與襄助。三妹無我。安能成業。今者三妹已畢業於上海伯特利

醫科專校。名列第二。余大女亦在該校同時第三名卒業。當設產科醫院。以謀生育之改良。爲三吳女界諸姊妹方圖幸福。余子三人。長入大學。次在中校。幼在小學。讀書自勵。卒業在邇。四五小女。亦尙奮學可喜。皆知克勤克儉。垂爲家法。余二十三年來。殫思竭慮。設法支持。酌盈劑虛。使無虧耗。雖迫於時勢。支絀時虞。從不敢對於祖產上。有所變更。愧對兒孫。卽一椅一木。莫不謹慎保存。此敢告慰於我親戚友朋者也。惟余私心所耿耿者。余姪徵伯。早入華籍。(按國籍法、女嫁外國人卽入夫籍)愛國運動。不後於人。何以不能見諒於我中華同胞。而勞我故國領事之表彰也哉。

中華民國十六年二月十一日稿

●草堰場公署覆函

(月芝錄)

有人函知徵伯。謂徵伯名下之鹽灶十副。亦爲北京二房擅自私售等語。徵伯初不之信。以二房未必有此辣心腸。特函詢草堰場署。茲得覆函如下。該灶產已歸何人支配。務乞詳覆。逕復者。昨接大函。查詢安益泰鹽店。何日閉歇。該灶產已歸何人支配。務乞詳覆。等因。當經檢查案卷。該商安益泰店。原存鹽灶二十副。於民國十年。絕賣於大豐鹽業公司執業。會據雙方出結。呈請轉呈兩淮鹽運使署。核准立案。准函前因。相應函復台端。查照爲荷。(下略) 草堰場公署啓(七月二十六日)

余二十三年風雨飄零的苦心談

●江季子致章行嚴書

行嚴先生鑒。頃讀 尊作跡府篇。(見甲寅第四期)對於汾陽王徽伯。頗多指摘。僕竊以爲過也。夫康脫。哲學家也。而羣謗蜂集。周公古聖也。而流言蜚起。悠悠衆口。何足定憑。况徽伯既無細行不檢之事實。又安有不理衆口之成績乎。僕與徽伯共患難者十餘年矣。故知之頗深。平情而論。徽伯堅忍沉毅。百折不回。求諸輓近。蓋難其選。謂余不信。請徵事實。徽伯弱冠喪父。仵伶靡依。乃隻身去蘇。浪游東亞。由朝鮮。而臺灣。而琉球。而東京。三戶子遺。新邦志士。靡不友善。不理衆口。從何說起。迨民二返申。偕王博謙辦民強報。亦以直聲鳴於世。未幾袁氏稱帝。舉世滔滔。徽伯挈家避難。沒隱於鄉。然猶時以愛國文字與世相見。逮南北和議開始。公以南政府關係。在滬構和。王一堂以北政府代表。奉命赴會。時海上輿論。揚南抑北。幾成口禪。徽伯獨排衆議。創蘇報於吳門。高唱統一。擁護中央。僕亦廁筆其間。多所論列。越三月一堂始再赴申。徽伯又援助鄭雲渠創大公報於申浦。出版僅數日。而言論界爲之一變。比安福敗績。蘇督李純。懸萬金賞。購徽伯頭。且嚴令大索。逮捕妻孥。沒收家產。若尋蘇報。拘記者。猶屬池魚殃及耳。徽伯幸先一日離蘇。故以身免。乃走

東瀛。重研學術。然素志堅定。雖窮困亦不渝此。豈朝南暮北諸人所能夢跋乎。且徽伯開罪於公者。不過因月旦甲寅。有「自道之處太多與讀者之趣味不相生」數語耳。以僕觀之。我公應引爲諍友。拜受嘉言。獨奈何以感情用事。效村婦罵人之故智乎。僕不敏。亦曾東脩東國。宴游美洲。雖博一文憑。不堪獲銜。然於新聞事業。亦略有研幾。且習聞威權學者。及言界泰斗之偉論。深知報紙與雜誌。體例不同。報紙以一日爲生命。故貴明顯。雜誌生命較永。故重學說。日本中村博士曾對僕言曰。「雜誌宜有統系的論評。及中立之色彩。決不可以感情作用。而使成爲個人機關耳。」卓卓名言。足爲吾黨啓引。然此猶可諉曰空論。請更言其實例。大隈伯者。日本偉人也。然主辦新日本雜誌。詭以世界眼光。批論得失。不獨一事一言。未有以己身而紀載自事。卽偶涉己事。從未有下筆曲評者。巽斯禪者。亦美洲偉人也。創刊雜誌。不下十餘種。然決未嘗稍失旁觀態度。且嘗作評論。自培其短。其爲人又何如耶。今我公以司佩鐵特(卽袖手旁觀人)自居。固吾人之所樂聞者。第平心觀察。我公今日所居地位。是否袖手。我公今日所評紀事。是否旁觀。想內心自省。不難推定。何者前之甲寅。諱爲司佩鐵特可也。今之甲寅。諱爲半宣式之公報也可。卽謂我公之日記也。亦未始不可。威魯孫云。「吾

人讀新聞雜誌。須就其派別而定其性質。不可以表面文字而忽之也。」薇伯亦畢業於東京新聞學會。其得諸師承者。亦與此吻合。吾人準例以論。則甲寅之不能免御用紙美名。亦屬無可諱言者也。我公之司佩鐵特。特恐猶是前期甲寅之時代乎。抑僕尤有進者。我公文字優美。久炙人口。僕執筆於民權時代。屢於民立報上。欣賞奇文。竊今日甲寅。固期明以樸實說理爲標題。而我公乃飾以高深文字。得母村媪而強衣美錦乎。僕雖未獲擅謁。一聆偉論。然僕於滬上創辦亞洲大學之際。曾由老友田桐君說項。蒙我公允許。作義務教員。至今思之。猶覺難忘。惟私心既切嚮往。而責備賢者之念。倍形顯著。以我公襟懷海闊。而對於老友薇伯。反作文字上之譏評。此誠僕之所認爲遺憾者。且近人受人指斥。輒返唇相讖。此乃意氣用事者之所爲。我公亦出此乎。語云惟善人能受善言。我公乃袞袞當道。獨不能作一善人乎。冒昧陳詞。語多贛直。統希諒之。

前上海民權報主筆江季子上（八月廿二日）

●王蔭泰致其未婚妻兄陳漢翹請求離婚書

漢翹仁兄大人如晤。握別以來。星霜數易。渴想之忱。無時或釋。邇維僂社納福。潭第增祥。敬爲禱頤。弟庸庸碌碌。毫無寸進。所幸客中一是託庇。足以告慰耳。令六叔音訊隔絕。兩稔餘矣。邇狀如何。頗以爲念。中國政體。一旦而至於若斯。非意料所能測及。改頭換面事體重大。過渡時代。最易遇險。若得免于波浪順風而達彼岸。使彼虎視眈眈者。無隙可乘。中國之福也。吾哥志高學博。處此亂世。必有以補救祖國。當欣慕之至。弟來德時。道出申江。曾與吾哥把臂談心。多承指導。至今未嘗敢忘。惟於婚姻自由一節。竟見相背。諒吾哥亦猶憶之。弟到德以來。曾遊英法瑞典丹馬各國。於國家人生大事。亦稍留意。雖淺鄙粗陋。無足有歷大雅。然愚見若斯。愚志已決。故不揣冒昧。敢瀆清聽。中國舊習。素有媒妁之言。卜占之詞。不問性質之迎反。情意之投逆。隨意湊合。幼年定婚。外人所謂野蠻時代之贈與婚姻是也。蓋女子不以人倫。而視之以物。故曰贈與。中國古人。亦未嘗不非之。弟曾讀袁氏世範陸親篤有之曰。人之男女。不可於幼時便議婚姻。大低女欲得託。男欲得偶。若洽目前。悔必在後。蓋富貴盛衰。更迭不常。男女之賢否。須年長乃得可見云云。中國之人。因婚

姻不得自由。而終身不幸。以致愛靈而死者。豈可以數計哉。章太史曼仙。敵族長芍莊公之前事。非婚姻不自由所致乎。故弟以自由婚姻爲主。令妹收文明空氣久矣。亦必以爲然。滬上多賢。勿待不才。方今時局大變。萬端更始。舍舊從新。非自弟創。令六叔意見開通。主重自由。必將取消前約。各從其便。弟本擬自行函陳。惟天涯相距。恐郵遞不到耳。故敢拜託吾哥轉達令妹。代稟令六叔。是所叩禱。若承復示。請寄柏林中國使署轉交是企。專此敬請雙安弟王蔭泰孟羣再拜上言陽歷三月二日。

按此原函。由王蔭泰自德寄滬。復由陳漢翹轉致其祖母處。頃在安遇堂木箱中得之。俟再版時。當再精製銅版。

●摘錄彌勒菩薩訣之一

(月芝)

人弱心不弱。人貧道不貧。一心要修行。常在道中辨。世人愛榮華。我卻不待見。
名利總成空。我心無足厭。堆金積如山。難買無常限。子真他語言。周公
算。孔明大智謀。樊噲救主難。韓信功勞大。臨死只一劍。古今多少人。那
幾千。



書後

日昨余兄薇伯。以薇嫂近著「二十三年風雨飄零的苦心談。」稿本寄讀。余讀未竟已不覺涕淚之從何來也。薇嫂與兄。固爲有力之內助。薇嫂與我。尤爲生死之救主。何以故。敢舉其說。薇伯與我。爲從堂兄弟。薇伯之祖。固我之大叔祖也。我之大叔祖母。治家綦嚴。我父母以家道不振。貧不能炊。曾乞哀於我大叔祖母前。欲求一飽。以了餘年。情至可慘也。我大叔祖母固慈悲爲懷。愛而憐之。特命我父移居其鐵瓶巷王府門房中者。一年有餘。我父日與府中所謂二太爺者。抱膝暢談。亦足至樂。時我年十有二。父母愛莫能生。日夜哭泣。適薇伯暑假旋國。慨然以扶養爲己任。攜我赴東。薇嫂始則授我日語。繼則送我入校。朝以繼夕。訓誨兼施。我居東四載。始知骨肉之

樂。有如是者。民國初年。卒業返申。今日之得以家室歡聚。兒童繞膝者。皆我薇嫂之所賜。情關弟兄。不必言謝。固亦不敢忘焉。特書其後。爲余作生平之一紀念已耳。

中華民國十六年八月十八日蔭康壽臣記於海上華商紗布交易所之經紀人室

●張文和公

(月芝)

張文和公(英)安徽桐城人、爲前清名臣、當其做宰相時、有里家建屋、因佔地拆其家之照牆、家人致書於公、請示辦法、後接公覆書、拆視並無信函、僅有詩一首、詩曰、

千里來書只爲牆。護他幾尺也何妨。長城萬里今猶在。不見當年秦始皇。

中華民國十六年八月二十日出版

(定價大洋三角)

著作者

王

月

芝

校閱者

吳 王 王

維

熾 萊 瀛

版 所 有 權
不 許 復 製

印刷所

蘇州文新印刷公司

西中市四十八號

發行所

各大書坊

6
101074

蘇州風景明信片

每張大洋五分
共有三十餘種

雙塔 李鴻章別墅 拙政園 無錫充山 無錫管社山 無錫錫山 無錫公園 天平山萬笏朝天 北寺
塔 留園 蘇州市立圖書館 虎邱山塔 石湖行春橋 鐘樓 寒山寺 閶門外普渡橋 無景殿 盤門
桃山嶺 天池山 西園 虎邱山寺 蘇州雙塔寺 木瀆笛樓 玄墓山夜景 胥門朝景 虎邱山瀟 靈
岩山 楓橋 獅子林 瑞光塔 寶帶橋 元妙觀三清殿 觀音寺 蘇州驛

蘇州風景書箋

共有十種·裝成一盒·
每盒百張·售洋四角·

留園 元妙觀 西園 拙政園 寒山寺 寶帶橋 虎邱 北寺塔 雙塔寺 天平山